

モ  
ブ  
×  
黄  
瀬  
ア  
ン  
ソ  
□  
ジ  
ー

R-18

**LOCKDOWN**  
K 常工一スでイケメンモデルが  
狙われています



灯里 / SparkMaster

あまなつ / mix juice

市花マツビ / locker80

ウエノ深 / ハートブレイクマン

うにゃあ / うさもり

おたま

架月 / sigmastar

かづき / 混合色

ココ / AIPO!

斉木マキコ / ぴくりんさん

ささはられな / 07KOUBOU

そらみ / 霹靂

高橋あさみ / idiot

つきおかあいる / うさもり

ニシナ / Not Equal

春乃ハナコ / hana\*Gallery

真嶋しま / ALCO

又秋めい / Poisoning

ako / crowmania















はっ

はっ

はっ

オオオオ

オオオオ

はっ

はっ



# CONTENTS

## Illust

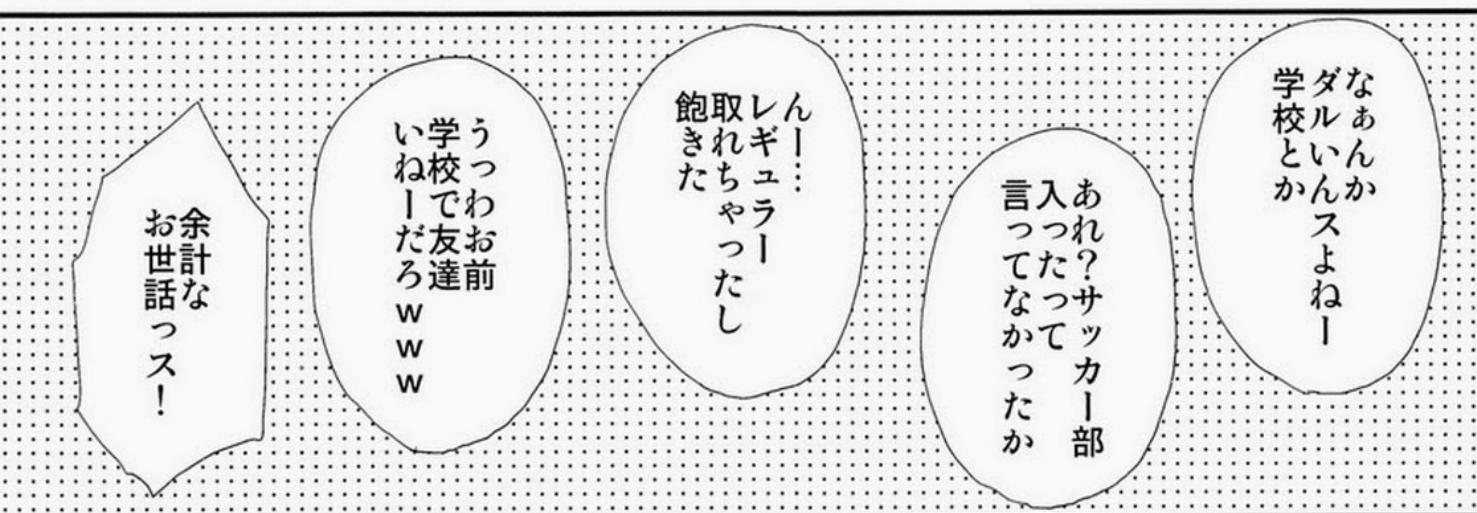
架月  
市花マツピ  
真嶋しま

## comic & novel

高橋あさみ .....	3
そらみ .....	9
かづき .....	15
うにゃあ .....	23
ニシナ .....	29
春乃八ナコ .....	35
灯里 .....	41
ウエノ深 .....	49
おたま .....	61
ささはられな .....	69
ココ .....	79
つきおかあいる .....	95
斉木マキコ .....	103
又秋めい .....	115
あまなつ .....	123
ako .....	135

**LOCKDOWN**  
ソングアーティストでイケメンモデルが狙われています





















いつちや...

う...う

あっ

あー

ゴッ

はっ

はっ

この絶対  
にのいば  
や

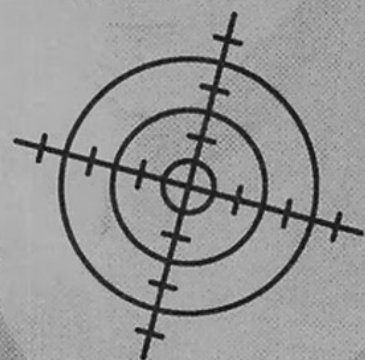
は...

ハマリ...

気持ちい...  
何これ

あ...





**LOCK\*ON**





はーい  
オツケー！  
お疲れ様  
黄瀬くん

お疲れ様  
でしたっ！



って  
うぎやあ  
ああああ

超寒  
いやばい！

※夏物の撮影時期は冬

俺とキセリヨと冬の海  
そらみ



あつ  
ありがと…

俺が  
付いて  
いきます



ちよつと  
トイレ行って  
来る〜！

あつ  
ちよつと  
一人で勝手に  
行っちゃ…



あれ…  
あんな  
スタツフ  
いたっけ！





アハ...

.....っ

しようがない...よな

キ



アハ

アハ

うう...  
海水浴用地じゃないからってトイレはない...  
なんて...

てゆーか  
こんなところで  
スタツフ以外に  
鉢合わせたら  
気まずいツス...



フ.

変に遅いと  
スタツフさん  
心配する...



うわあッ?



よよし

ここらへんで  
ささっと  
すませて戻る





なに？

さて誰でしょ？

まあ強いて言うなら君の熱烈なフアンで…

君が一人になるところを狙ってた…ってとこかな

アンター一体誰っすか？

は…はあ…？

ガッ



うあ…っ

チャンスだと思つてタイミングを見計らつてたんだよ

だから君がうちの近くに撮影に来るって聞いてね

初めて君を見たときからずっと好きだったんだよ…





あ…っ  
やめろ  
さわるなっ  
へんたいっ

や…っ

変態？  
おかしいな

それならその  
変態に触られて  
勃ちちゃってる  
黄瀬くんは  
どうなのかな？

フッ  
フッ



黄瀬くん…  
俺もうガマン  
できないよ

黄瀬くんも  
気持ちよさそうだし  
入れてもいいよね？



はあ…  
たまらない



やば…  
やめ…！





やあ…ッ!

痛…っ

痛い!  
抜けよおっ…!!

そんな事言う割りに  
黄瀬くんの中  
俺のち○ぽに絡み付いて  
離れないよ

こんなにぎゅうぎゅう  
締め付けて…ほんとは  
お尻を苛められるのが  
嬉しいんだろ?



そんな事…っ  
…あ…っ

やだ

やだあっ

黄瀬くん?  
どうした?

あ…





う…  
やだ…

見んなっ…  
見んなよ…っ!

あーあ  
そんなに  
ガマンしてたの?  
悪いことしたなあ



やだなあ  
こんな事くらいで  
僕が黄瀬くんを  
嫌いになるわけ  
ないだろう?

まあ他の人が  
同じかどうかは  
わからないかなあ



だれか  
助けて…!

う…

ほま  
ねえ?黄瀬くん  
君はどう  
思うかい?

そうだ  
この写真  
他のフアンの子が  
みたらどう  
思うかなあ  
カマキ



身体が重い。だるい。

思考が定まらないまま、ふ、と意識が現実に戻った。

最初に見えたのは、見覚えのない、白い天井だった。病院のように真っ白な天井にシミ一つない。どうやら、仰向けでベッドの上に横たわっているらしい。息を吐いて、吸って、呼吸ができることを確認すると、自分はまだ生きているのだと思う。

手首に冷たい金属の感触があると思えば、頭の上で両手が固定されていた。動かそうとすれば、チャリチャリと鎖の音が聞こえる。

(なんで、こんなことになってんスカね?)

思っているよりも自分は冷静のようだ。

今日が何日で、今が何時で、ここがどこであるかすらわからないというのに、自分が黄瀬涼太であることは、覚えている。

まだ覚えている。

自分の記憶だけが頼りで、他に継るものなど何一つない、異常な事態に陥っていた。

いつからかはわからないが、意識を失い、覚醒し、

再び意識を失う。それを繰り返しているようだった。

(黄瀬涼太。誕生日は六月十八日。血液型はA型。

海常高校一年。バスケットボール部)

家族の名前、自宅の住所、電話番号。黄瀬涼太であることを忘れないようにと、脳内で繰り返す。

制服のシャツはボタンが全てはずされ、鍛えられた胸筋、腹筋が露わになっている。ズボンには下着ごと脱がされているらしい。

膝は折り曲げられ、足首もベッドの手すりの左右にそれぞれ固定されていた。あられもない酷い恰好をさせられていることもわかっている。

(のどが渴いた:)

思考を現状から逸らそうとするのは、今の時点では何もできないからだ。

逃げることも暴れることもできない。

泣き喚いたところで、助けもこないだろう。

それを知っているのは、試したことがあるからなのかもしれないが、その辺りの記憶はあやふやだった。

目を閉じて、溜息を吐いた瞬間、ありえないところから、快感をもたらす刺激が全身を貫くように走り抜け、反射的に腰が跳ねた。

「あつ、……ああ、んっ」

唇から零れる甘い声。



下腹部に感じる異物感と微弱な振動が、内壁を余すところなくひっかき始めた。異物には突起があるのか、弾力のある粒が容赦なく擦り出した。

いつから入れられていたのか、覚えはなかった。ただ、それが無機質な大人の玩具であると、理解できた。自由にならない状態で、それから逃れることなど、できるわけがないことも。

「ひ……い……んうっ。うああ、ああ……っ、あっ、あ、あ……あ……あ……」

言葉を発することもできず、与えられる快感に腰を揺らし、身体を震わせ、悲鳴にも似た嬌声をあげていく。閉じられない口の端からは、だらしなく唾液が流れ落ちた。

快楽から逃れようと身を振るけれど、その動きすらも刺激にしかならない。自分で自分を追い詰めていけば、萎えていた中心も徐々に頭を擡げ、先端から液体がたらりと流れた。

「あ、ああ、んっ……はっ」

呼吸すらもままならず、酸素を求めろけれど、吐き出すことが精一杯だった。

再び意識は熱に浮かされ、絶え間なく与えられる快感に、何も考えられなくなっていく。

下腹部内をぐりぐりと蹂躪し続ける玩具は、振動だけに留まらず、今度はゆるやかにうねりだした。

それは、規則的な振動に耐えることに慣れ始めた身体をまたリセットする。

「やあああああ……っ、や、やだ、やめ、いやだ、や、あ、ああ……っ」

新たな快楽と快感に襲われることへの恐怖で、黄瀬はぶんぶんと首を左右に振った。それでも玩具であるそれは、躊躇うことなく振動とうねりを内部で繰り返す。

下肢は自らの意と反して、気持ちの良い場所を探すようにゆらゆらと揺れ、つぶつぶの突起物が敏感な箇所当たる様、仕向けていく。

「は、ああん、あ、あ、そ、そこ、や、あああ……っ、い、いく、いく……」

ちようど疼いてたまらないそこをピンポイントで擦られ、腰が跳ねるように浮いた。

痛いくらい張りつめていた中心が、その解放を求めているのを感じていたけれど、触れることができないもどかしさに、追い詰められていくだけだった。射精もできず、下肢だけを絶えまなく責め立てられ、悶え苦しみながらも、与えられた快楽に身を委ねることしかできない。

耳に届くのは、手首を繋ぐ鎖の金属音、下肢に埋め込まれた玩具の振動音、それから、自分の喘ぎ声。腰が、背中が、身体が揺れては、唾液が零れ、喉



が渴き、視界がぼやけた。

「ああん、…っ、あ、…んっ、ふ、っうああ…」

水分のない喉は、もう、ろくに声を出せないはずだというのに、ぐねぐねと内部を抉るような動きに合わせて、微かな音を漏らし続けた。

とろとろと堪え切れない精液が先端から流れるけれど、たまりにたまった解放されない射精感の苦しきからは逃れられなかった。

ぎゅっ握って、触れて、全てを放ちたかったが、腰を上下に揺らしたところで、かなうことはない。

(た、す、けて…)

気持ちいい、苦しい、気持ちいい…。

快楽に翻弄されながらも、かすみかけた意識を残したまま、天井を眺めれば、その白さに絶望をする。

「イキたい？」

何もなかった世界に突然割り込んできた低い、野太い声が耳元に響いた。

「…っ、ああ、…ん、ふ…っ」

何かを言いたかったけれど、言葉にならない。

熱をもった、気色の悪い、男の気配だ。

太い指が、胸の突起に触れた途端、身体がびくんびくんと震えて跳ねた。

「そんなに、気持ちいいの？」

ぐりぐりと硬く膨らんでいた二つの突起を両手で

同時に弄られ、抓まれ、下肢とは異なった刺激に、ぐったりしかけていた身体が、嫌でも反応してしま

う。

「い、や、…、やあ、…め、ああんっ」

「もっと弄って欲しいの？いやらしいね」

「ち、があ、ああ、っ、んん、あ、あ、あ、…っ」

指先の硬さがさらに性感を煽って、黄瀬は嫌悪感を抱きつつも、脳天を突き抜けるような快感に、ただただ、官能的な声をあげるしかできなかった。その声がまた、嫌だというのに、止められない。

「僕はね、黄瀬くんがモデルを始める前から知っているんだよ。ランドセル背負ってつまらなそうに小学校に通っていたよね」

突起を弄っていた指の動きが止まると、今度は手のひらが、胸から腹を撫で始めた。汗ばんだ肌を確かめるように、ぺったりと触れた手のひらが、筋肉や骨の形をなぞりながら厭らしく上下に蠢いた。

「ん、あ、…やあ、だ」

刺激に弱くなっている身体は、玩具によって犯され続けられている後孔の振動とも相まって、その手のひらの動きに翻弄される。

「中学生になつてモデルを始めたよね。黄瀬くんのそのキレイな顔が日本中に知れ渡るのが、どれだけ嫌だったかわかるかい？黄瀬くんのそのキレイな黄



色の髪も目も白い肌も長い手足も僕だけが知っていればいいことだったんだよ？」

男の手のひらは下半身へと移動し、中心を避けるように太腿の内側を撫でまわした。その際、指先が勃ち上がったそれにかすると、酷く悦ぶように腰が揺れた。もっと、触れて、と強請るように、前後に動こうとする腰は、もはや、自分の意志も羞恥も介在しなかつた。

「どうしたのかな？」

焦らすように陰部の茂みにだけ指先で撫で、すぐにまた、太腿をさする。

「どうして欲しいの？」

囁くような低い声は、気色悪さを増し、溢れそうな唾液の音まで含んでいた。

そんな男の言いなりになりたくはなかつたけれど、そんなことさえもう考えられないところまで、追い詰められている。

「あ、あ、い、いじって、…ふっ、んあ、…いか、せ…てえ…っ」

撫でられている太腿は敏感になっていくせいから、足首が固定されているにも関わらず、その手から逃れたいと暴れた。もちろんそれが許されるわけもなく、暴れる足を弄ぶように、男の指はやんわりとその形を辿る。

「イキたいの？」

腿にべつとりとした湿った感触が走った。それは、すぐに男の舌だとわかる。アイスキャンデーを舐めるように、下から上へと足の付け根から膝へと味わうように、男の舌がねつとりと動いた。

「ひゃあああああっ」

一際甲高い声が響く。

「ん？キモチいいの？」

べろべろと舌全体を使って舐めまわされる感触は、不快でしかなかった。黄瀬はかろうじて残っていた意識で、無理矢理男のいる方を睨んだ。

「はっ、き、もち、わ、…っ」

全部を言い切る前に、黄瀬からさらに激しい悲鳴があがった。

はち切れんばかりに勃起した中心の先端を親指で強く塞がれたまま、握り締められたからだ。射精を許されないばかりか、力任せに握られた痛みに、全身が硬直する。

激痛に見開いた目に映ったのは、やはり白い天井で、男の姿など影すら見えなかった。

頭の中は真っ白に弾け飛んで、下肢に集中する痛みの中、今もなお続く玩具の振動に、振り回される。両目からぼたぼたと流れ出した涙は、そのままシートを濡らした。

「どうして欲しいの？」

同じ質問をされて、黄瀬はなんとか首を横に振った。もう、何も答えたくなかった。

「ちゃんとと言えるでしょう？」

「ひ、ぎ、あ、ああつ」

親指で塞がれたまま扱かれて、再び悲鳴をあげた。酷い痛みにも、涙が止まらない。

「い、いかせて、く、だ、さ……」

嗚咽混じりで、なんとか答えると、男はようやく満足したのか、指を放した。それと同時に、黄瀬から白濁した液体が噴き出し、腹部を太腿をシーツを汚した。

長時間続いた射精感から解放され、全身の力が抜けていくが、分散されていた快感が再び下腹部に集中し始めた。

はあはあと酸素を求めながら、それでも、勝手に喘ぎ声が混ざるのは、いまだ身体が内部を蹂躪し続ける玩具によつて、快楽に躍らされたままだからだ。打ち寄せては止まらない快感の波が繰り返され、その苦しさに喘いだ。

震え続ける身体が重さを増した頃、突然、玩具の振動が止まった。そこでようやくやく、黄瀬は深呼吸ができたような気がした。

ずるりと中に入っていたものが抜き取られる感覚

の後、酷い倦怠感に襲われる。目を開けることさえ怠く、指先さえ動かかせないような気がした。先刻まで支配されていたはずの快感はどこか遠くへと消えていくように思えた。

このまま意識を失うことができたなら、きつと楽になれるかもしれないと思つたが、それは叶わぬ願ひだった。

「黄瀬くんは、いやらしくて、きれいで、かわいいね」

男の荒い息が近付いてくるが、身動きはとれない。「最高だよ」

内腿を掴まれ、広げられたと思つた瞬間、後孔から貫かれる衝撃が走つた。

「うあああああつ」  
もう、声など枯れ果てたと思つていたというのに、

先刻の異物よりもずっと大きく熱いものに圧迫されたことで、呻くような声が出た。

「やっぱり、ゆるゆるだね。ほら、ちゃんと締めてよ」

前後に激しく揺さぶられ、突き上げられて、力の入らない身体が振り子のように揺れる。

身体に甘い疼きを感じて、ぐずぐずにとけていきそうだった。

玩具に、指に、舌に、翻弄され慣らされた身体が、



その快感を覚えたからか、男の太く熱いものを簡単に奥までくわえこんでいく。

「んひいつ……あつ……んんう……」

「ほらほら、もっと欲しい？欲しい時は欲しいって言わないとね」

十分な質量のあるものに内壁を抉られ、擦られ、身体は何度もえび反りにびくびくと跳ねた。果てたばかりの中心も再び頭を擡げ、硬度を増していく。

「黄瀬くんは中学二年になった時にバスケを始めたでしょう？身長も伸びてどんどん逞しくなって、なのに、このキレイな顔は小学生の頃からなんにも変わってないね。黄瀬くんはキレイなんだから、誰の目にも触れさせちゃいけないだよ」

腰の奥に刻まれていく律動は、玩具からは与えられることのなかった快感を蓄積していく。

感じる場所をしつこく責められて、喉の奥から漏れる嬌声は、再び途切れなくなった。

快感に悶え、よがり、ただただ、猥らに震える。助けて欲しいと訴えたくても、言葉が出せない。

身動きとれないまま、ただ、無力に犯され続け、意識をなくすことも許されず、気が狂いそうだった。

「あ、あ、最高だよ、黄瀬くん。最高……」  
荒い息を吐き出しながら恍惚に濡れた声をあげた

男は、腰を大きく回すように動かしては、深く差し

込んだそれで内部を掻き回した。そのねちっこい腰使いに甘い嬌声が繰り返し零れた。

そうしているうちに、ぶるぶると男が腰を震わせ、圧迫感が少しだけ緩んだ。中に射精されたのだとわかったが、もう、何もできなかつた。

達した男は、それを抜こうとせずに、そのまま黄瀬の身体の上のしかかかってきた。汗ばんだ体臭を含んだ重さと熱を全身で受け止めるほかなく、黄瀬はその息苦しさに小さく呻いた。

「黄瀬くん、黄瀬くん、キレイだよ」

はあはあと気色の悪い息が近付いた直後、生ぬるく濡れたものが顔を撫で始めた。

「ひ……っ」

思わず顔を背けたけれど、それくらいで逃れられるわけはなかつた。男は鼻息荒く、黄瀬の顔をべろべろと舐め続けた。

「そう、この顔。黄瀬くんのキレイな顔は全部僕のだよ。もう、誰にも見せちゃだめだからね」

頬を鼻を額を余すことなく舐めていく感触に鳥肌が立つ。もうやめろと言える気力も体力も残っていないなかつた。

朦朧とした意識の中で、男に子供の頃からずっと自分を見られていたことだけはわかつたけれど、それは気味の悪さを増長するだけで、何の解決にもな

らなかつた。

(誰か助けて：)

硬く閉じていた黄瀬の目から、涙が零れ落ちていく。

いつのまに意識を失っていたのだろうか。

時間の経過もわからないまま、ふ、と目を開ければ、やはり白い天井が見えた。

(夢、な、わけねーよな)

全身に残る倦怠感が、悪夢のような現実を突き付けてくる。

両腕は相変わらず頭の上で繋がれたままだったが、下半身の拘束ははずされていた。伸ばされた足をそつと曲げてみる。動かせることに安堵すれば、下着をはいていることにも気付く。

ぐちゃぐちゃに汚れたはずの身体はキレイに清められていたようだった。

「起きたの？」

ベッドの側に男が近付いてきたらしい。気配しかわからないが、無意識に鳥肌が立つ。

「……、もう、家に帰してください」

今日が何日で、今が何時で、いつからここに繋が

れているのか、黄瀬には何ひとつわからなかつた。

「どこに帰るの？ここが、黄瀬くんの家でしょう？」

白い天井と男の低い声。

黄瀬の懇願は、どこにも届かない。

遠のく意識の中、繰り返される快樂の渦に身体を支配されていくだけだった。

終わり



呼び止められた  
時から予感  
してた

別に断っても  
いいけど？

断ることは  
出来なかった

ただ他に  
代わりを探  
すだけだからさ

お前の教育係の  
黒子とかな

そんなこと  
絶対に許さない

っあー  
いいわこれ

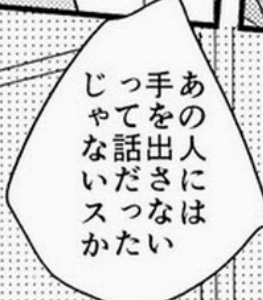
ズッ

うあ…っ

んッ

ズッ









こんなんで  
感じちゃうほど  
アイツが好き  
なんだ

つーか  
黒子に見られてる  
みたいで興奮する？

あれえ  
前もおつきく  
なってきたよ  
黄瀬く〜ん

おもしれーっ  
おもしろ

や、見たく  
な...っあ

おー  
我慢汁でてきた

僕の気持ち  
いいトコ  
きみに見て  
欲しいのっ♪

ひやははっ

気持ちよく  
なんか...っ

すっ  
すっ  
すっ

すっ  
すっ  
すっ

すっ  
すっ  
すっ

すっ  
すっ  
すっ

うっ  
うっ

うっ  
うっ

や

は...っ

んあっ

おもしろ

うっ  
うっ

すっ  
すっ





やば、  
前と一緒に  
反則だっつもの……

強姦されて  
可愛い喘ぎ声  
出ちやっつて  
よーっ

超気持ちよさそっ



ひあ……  
あ

ほらもう  
すぐイカして  
やるよ……

一緒に  
出そうぜ？



あ……

っはは  
俺もヤバイわ  
は……



ってか  
なんかもう  
意識とびかけ  
てね？



ア  
ああ……ッ

ん、あ

あ……ッ

……ははっ

やべーわ俺  
女以上に  
ハマりそー

マジでえ？  
やべーわ  
それーっ



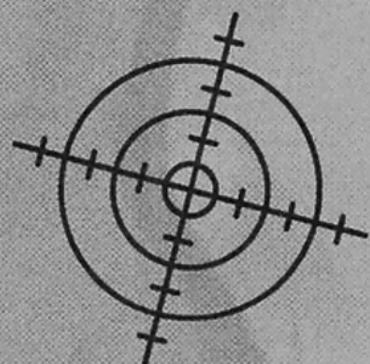
……ねえ  
黒子っち

口にする  
ことはもう  
出来ないから

「大好き  
だよ」

写真の君に  
そう伝えて  
おくね





**LOCK\*ON**

## メロウメロウ

### ニシナ

仕事を終えた後訪れたのは、人肌恋しくなると立ち寄る店だった。疲れた体に染み渡るアルコール。その至福の時は、隣から覗き込んだ男によって遮られた。

「あんたひよつとして、キセリヨー？」

まじまじと顔を眺め、問いかける声は確信的だ。

サングラスなどで誤魔化すことなく素顔を晒しているのと、声を掛けられることはよくある話。今や日常のひとつこととなつている。学生時代から続けているモデル業は、卒業と同時に更に多忙となり、それに比例して街中で声を掛けられることも多くなった。握手やサインを求めてくるのはプライベートな時間も関係なく、ある意味有名税のようなものだと言っている。

だがそれも、残念ながら好意的な相手ばかりではない。からかい半分、やつかみ半分、負の感情を向けられることも往々にあり、現に今、向けられているのは、後者だと思われた。

「人違いっス」

争い事を起こす気はないので、極力さりと否定する。けれど男は引くことなく、更に顔を近付けた。

「んなことないでしょ」

酒臭い息に眉根を寄せて身を引くと、馴れ馴れしく肩に手を置いてきた。

「ちよ、ちよつと……！」

「嫌がらなくてもいいだろ？ この店にいるってことは、男もイケるお仲間なんだから」

同性を恋愛対象とする人が集まるこの店で、独り飲んでる目的は男が示唆した通りだ。今更隠し立てするつもりはないが、ようやく得たオフタイムを過ごす相手は自分で選びたい。隣の男を選ぶくらいなら、独りで飲んでる方が余程まだ。

「ホント、人違いっスよ」

あくまで穏便に片付けようとするのに、男は察しも悪いらしい。露骨に不快さを浮かべた顔も拒むオーラも、何一つ気にする素振りなく、強く肩を引き寄せる。

「な？ 一杯飲むくらい、いいだろ？」

「アンタいい加減に——」

しつこさにうんざりして荒げた声は、男の悲鳴にも似た大きな声に掻き消された。



驚きに顔を向けると、ついさつきまで下卑た微笑みを浮かべていた男が、苦痛に顔を歪めてカウンターに伏している。後ろから捻り上げられた腕は、今にもミシリと嫌な音が聞こえてきそうだった。

「しつこい男は嫌われるぜ、オニーサン」

馴染みある声に、弾けるように顔を上げた。

まさか、と思うと同時に、ひよつとして心が揺れる。だが抱いた期待は、声の主を見た途端、シャボン玉のように音を立って消え去った。

その声、話し方は恋人——いや、元恋人の青峰そっくりだったが、そこに立っていたのは全くの別人だった。

当たり前だ。こんなところに、青峰がいるわけがない。彼は今、アメリカの空の下だ。

中学の頃から焦がれた相手は、高校を出て直ぐにバスケットの本場へと活躍の場を移した。

日本で埋もれる才能ではないし、賢明な選択だったと今でも思う。実際その話を聞いた時は、心の底から喜んだ。会えなくなることや、アメリカまでの距離が現実味を帯びたのは、青峰が向こうに渡ってからだ。

その後、何度か連絡を取っていたものの、時差や生活環境の違いから疎遠になるのは思いの外、早いものだった。最後に届いたメールは、『こっちは来たなら連絡しろよ』のひと

ことで、どこを見ても「来い」と書かれていないそれに、短いながらも濃密だった恋人としての期間が終わったのだと実感したのが二か月前の話だ。

「何か問題でも？」

騒ぎを聞きつけたオーナーが出てきたことで、止まっていた時間が音を伴って動き出す。組み伏せられていた男は、まだ脂汗を浮かべて呻いていたが、オーナーの取り計らいでそれ以上の制裁は加えられなかったようだ。捨て台詞を残しながらも、逃げるようにその場を去って行った。

「あ、りがとう」

「別に、大したことじゃねえし」

礼を言うと、返った言葉は素っ気ない。そんなところもどこか青峰を彷彿とさせ、慌てて頭を振って元恋人の残影を追いやると、黄瀬はまだグラスに残る酒を飲みながら、横目で男を伺い見た。

その言葉の通り男にとって大した問題ではないらしく、話はそれ以上続くことなく、男はバーテンダーと何やら話に興じている。

よくよく見なくても、体格も顔立ちも全然似ていない。

背丈は黄瀬と変わらないが、体にぴったりと張り付いたシャツ越しにも逞しい筋肉質な体が浮かび上がり、無駄のない引き締まった体躯をしている。

鼻筋の通った顔は整っていて、強い光を宿した切れ長の目が蠱惑的な雰囲気を出す。その目に射竦められるだけで背筋にぞくりとした寒気にも似た甘い感覚が這い上がってきた。聞き手が、何より気になるのは、その声だ。時折漏れ聞こえる話し声にすら、敏感に耳が反応する。

聞きたい、その声を。もっとその声を聞きたい。

何度か胸の内でも繰り返した言葉に突き動かされるように、黄瀬はグラスに残った酒を飲み干し、男の肩に手をかけた。

「——なに？」

「あー、一杯奢らせて欲しいなって」

誘い文句としては陳腐かつ使い古されたそれに、さっきの礼だと付け加えると、納得したのか怪訝な表情を一転させる。そしてずっと目を眇めると、まるで値踏みをするかのような視線を寄越し、たっぷり眺めた後、男は口許に微笑みを浮かべた。

「だったらさ、あっち行こうぜ」

慣れた仕草で店の奥を顎でしゃくると、男は返事も聞かずに歩き出す。その先にあるVIPルームへ行く意味は、改めて考えるまでもない。振り返ることなく向かう背中を追いつながら、胸の高鳴りを抑えられなかった。

\* \* \*

部屋に入ると、すでに半裸になった男に苦笑しつつも、露わになった体躯に小さく喉が鳴った。服の上からでも受けた印象とズレもなく、引き締まった体は随分と好みだ。フロアの喧騒も、他人の視線も届かない隔離された空間では、互いの距離を縮めるのに多くの時間はかからない。ほどよく入ったアルコールも手伝い、服を一枚脱ぐことに、理性も羞恥心も剥がれ落ちていく。

何より一番酔わせたのは、やはり男の声だった。その声で囁かれると、得る快楽もいつも以上に思えた。

久し振りのセックス。例え行きずりでも、こんな出会いも悪くない——狭い部屋のソファの上で抱き合い、一頻り満足した後、二人は余韻の残る体を放り出していた。

狭い部屋に満ちた濃密な空気の中、ようやく息も治まったところで、男がおもむろに口を開く。

「いつもこんなことしてるのか？」

こんなこと、とは行きずりの行為だろうか。誘い誘われは、この手の店ではよくある話だ。改めて問われること自体不思議で、黄瀬は答える代わりに小首を傾げた。

「誘われても付いて行きそうにねえし、まさか誘われるとは思わなかったからさ」

「アンタ見た時から、ヤリたかったんっすよ」



「へえ、誰かに似てるとか？ 恋人？」

「んー、まあそんなとこ」

似ているのは元恋人で、しかも声だけだ。けれどそこま  
で正直に話す必要はない。曖昧に誤魔化すと、「ふうん」と  
言ったきり、男は黙りこくってしまふ。

「でも比べたワケじゃないっすよ？ アンタ上手かったし」

突然落ちた沈黙を破るように慌てて繕うと、テーブルに  
用意されたフルーツを食べながら、男はもう一度「ふうん」  
と眩き、おもむろにペニスへと手を伸ばす。吐精したばか  
りのそこはまだ濡れそぼり、男の手を汚しながらも与えら  
れた刺激を拒みはしなかった。

「ちよ、まだやるんっすか？！」

「時間、まだいいだろ？」

「いい…けど…も…出な…っ」

既に何度も吐精したせいで、出るものなどほとんどない。  
それでも快樂を知った体は、貪欲なまでに男の手管に応え、  
巧みな愛撫にじわじわと腰の奥から快樂が引き出されると、  
次第に息も荒くなる。

「ん…う…」

濡れた音に呼応して喜びにむせ、体が芯から昂る感覚に、  
艶めいた喘ぎが零れだす。

だが突然先端を襲う痛みで、喜悦の淵から引き戻された。

「痛…ッ！」

驚いて視線を落とせば、男の手が器用に細い金属を操り、  
ペニスの先端に当てがっている。それがさつき男が食べて  
いたフルーツに刺さっていたカクテルピンだと気付いて、  
黄瀬は大きく体を振った。

「ちよ、や…ヤダって！ 何してるんっすか！」

「暴れるなっ。怪我すんぞ」

だったらその危ないモノを外して欲しい。そう言いた  
いの、半ばパニックに陥って言葉が上手く出てこない。

「ほら、見てろよ」

あやすように額に口付け、甘く囁く声に促される先にあ  
るのは、今まで体験したこともない光景だった。

男の手に押し広げられ、ぱっくりと口を開いたピンク色  
の鈴口に、銀色の異物が鈍く光を放ちながら飲み込まれて  
いく。身動きしようにも、下手に動く怪我をしそうで逃  
げることもままならない。浅い息を繰り返し、痛みと異物  
の違和感をやり過ぎす間に、じつくりと時間をかけてそれ  
は根元まで差し込まれた。

「全部入ったぜ」

「へん…っ…タイ…」

愉しげな声に荒い息の合間から批難の声をあげると、男  
は微笑みを深めながら二本目を手に取って見せた。

「も、無理っ！ ヤ、ヤダ…ッ！」

一本でも耐えがたい。それなのにこれ以上なんて考えたくもない。

嫌だ嫌だと頭を振って拒むのに、動けない体にそれは無常にも鈴口へと差し込まれる。一本目よりも時間をかけ、それはじりじりと体内に埋められていく。

「ああっ…」

思わず天を仰ぎながら漏らした声は、苦しみを訴えるものではなかった。内壁を押し広げながら擦っていく冷たい金属の感触に背筋を震わせながら、ぞくぞくと疼きにも似た感覚に襲われる。

「ほらな？ ちゃんと感じてるだろ」

涙に滲む視界に映るのは、カクテルピンを二本も差し、萎えるどころか強く脈を打つペニス。

ウソだ、信じられない。こんなことをされて、反応する自分の体がわからない。

戸惑い、呆然とする体を男は軽々と足を抱え、奥へと体を押し進める。まだ残滓の残るそこは、ぐちゅりと卑猥な音を立てて再び男のペニスを呑み込み、奥まで深々と収められた時には愉悦の吐息と共に体が震えた。

「すげえな。さつきより締まってるぜ」

「…：…つく、…：…んあ…はっ…：…」

啞え込んだところを撫でられ、体温が一気に上がった。言われなくとも、熱を持ち収縮しているそこは男のものにしつかりと吸いつき、喰い締めている。

「は…ああっ…：…動…い、て…：…」

苦しい。いつまでも動いてくれない男に焦れ、掠れた声を漏らすと、男がククツと喉奥で低く笑った。

「自分で動いてみな」

「う、あ…：…はっ…：…」

引き起こされた体が、男を啞えたままその体を跨いだ。下から貫かれる体勢はそれまでよりも男を深く飲み込み、その質量にじわりと涙が眼尻に浮かぶ。

ほら早く、と言わんばかりに腰を揺すり上げられると、その先にある快楽を本能が求めだした。鍛えられた腹筋に両手を置き、ゆるゆると上下させる体は、自身のポイントを的確に見つけ出す。

「…：…つは、…：…あっ…：…ああ、あ…：…ああっ…：…」

浅いところを硬い先端で擦り突くのが堪らない。

もつと、もつと——今更羞恥心もなく、ただ貪欲に快感を求めて腰を動かすと、眼下の男が意地悪く口端を歪めて笑う。

「いい眺めだ」

「…：…る…：…さ、い…：…」



愉しげにからかう口調に言い返すも、鼻にかかった涙声では迫力などない。お返しとばかりに無遠慮に腰を掴まれ、下から強く突き上げられると、息をするのもままならず、与えられた快感を追いながら体を揺さぶられ続けた。

「はっ……ああっ……も、……ク……イ……クツ……」

頭の中は、もう真っ白だ。うわごとのように何度も繰り返しながら自分でペニスへと手を伸ばすと、まだカクテルピンの刺さったそこは、限界に近かった。

「んああ……っ、外……し……」

張り詰めたペニスに男の手が触れると、期待に全身が震える。じんと熱を孕んだそこは、痛みすら感じるほどだ。

「んっ……ね、早……く」

鼻にかかった声で甘くねだると、男は小さく息を飲み、カクテルピンを一気に引き抜いた。

「いいぜ、イケよ。涼太」

「あっ、ああっああ……っ！」

待ちかねた瞬間が訪れる。遮る物がなくなった尿道から、溢れ出る欲望の証。中の男を締め付け、ビクビクと何度も体を震わせて吐き出したそれは、男の腹を汚して広く飛び散った。

\* \* \*

「サイテー」

ぐったりとソファに身を預け、黄瀬は男に向かって言い放った。

「おいおい。あれだけ感じてたのに、そりゃないだろ」

「サイテー」

もう一度繰り返して、起こしかけた体を再びソファに沈める。動けない。指一本動かしたくない。疲労度はピークに達しているのに、心地よい充足感に全身が包まれている。久し振りの差し引いても、今までに感じたことのない最低で最高のセックスだった。

「またヤろうぜ」

軽い誘いに眉根を寄せると、男は満面の笑みを浮かべて指を三本立てて見せた。

「今度は三本入れてやるからさ」

「……やっぱアンタ、サイテーっす」

この男、似ているのは声だけだ。呆れた口調で吐き捨てながらも、大きく心臓が跳ねる。

三本のカクテルピンがもたらす快感——頭の中で、未知の扉がゆっくりと音を立てて開き始めた。

はあ

あっ

あ

はあ

はあ

ズンズン

ズンズン

保健室

んっ







はあ

黄瀬...  
たまっていた？

1週あいてる  
もんなあ...

はあ

んっ

あ

はあ

びく  
びく

スリ

スリ

すげえぞ...

はあ

はあ

ん

...もつと

ぬち

あ...っ

あっ

...エロッ

ちゅ

じゅ

ちゅ

スリ

スリ







あつ

あつ



ボソ  
ボソ  
ボソ  
じゃあ黄瀬  
またな!

お・おう!

うお!  
誰か来た!  
窓から出るぞ

やっべー

が  
ら  
っ  
が  
ち  
や



こんなところで  
サボってんのは  
だるれだ

...あ

!!

黄瀬!?

お...まえッ

まさか  
強...姦?

せんせ...

ど  
く  
っ



もう

木曜の放課後は先生いないんじゃないんすか…？

…じゃなさそうだな

今日は早く終わったから戻ったんだがお前は…何を…

せつかく場所にと  
いいたの  
見つけたの  
思っ

保健室をホテル代わりに使うとはな…。

幼い顔と身体でこいつは…

黄瀬…お前

先生

せんせい

ぐにっ

…勃ってる

ににっ

幼いだけじゃなかった…

今日、にににに帰ってきたことを後悔するべきなんだろうか…。

!!

# Peeping Tom

灯里

「へえ。それで振られちまったんだ」

「ああそうだ。こつちが口をはさむ間もなく、バツサリ」

「そりや災難だ。オマケに雨にも降られて？」

「本当に今日は踏んだり蹴ったりな一日だったよ」

差し出されるショートカクテルを一気におおる。自分の身体には強すぎるリキュールにくらりとしたが、この際構うものかとグラスを空ける。いい飲みっぷりだとばかりに片眉を上げたバーテンダーが追加オーダーをとる前に、「同じやつを」と憤りとともにぶつけた。

「オッサン、荒れてんなあ」

当たり前だ。今日荒れなくていつ荒れるというのか。

そう言い返すと、目の前の男はひよいと肩をすくめて空のグラスをさらっていった。

大通りから少し外れた地下の店を見つけたのは偶然だった。久しぶりのデートだと少し高めの店を予約したら、そこで容赦なく別れ話をされ、その上、女は想い人だというたいそう見目麗しい男を伴っていた。一方的な別れ話に食事どころではなく、店を出て傘を忘れたことに気づいたのは雨が降り出したときだ。最近の天気は安定とはほど遠く、にわか雨なんてざらにあることだった。間の悪さに舌打ちをしてどこか雨宿りをする場所を探していたところに入ったのがこの店だ。通りに看板も出ていない隠れ家のようなこの場所がバーだということがわかったのは、ひとえに目の前のバーテンダーのおかげだった。「階段で雨宿りされると邪魔だぜ、オッサン。そこに突っ立ってるくらいなら飲んでけよ」バーテンの制服を着こなし、きつちりとボウタイを締めた姿からは似つかわしくない言葉づかいに驚いたものの、申し出はありがたく、雨宿りに寄らせてもらった次第だ。

「まったく、女ってのは何で顔のいい男がいいんだか」

「そりやまあ、悪いよりはいい方がいいんじゃないか？」

「そんなことを言うけど、じゃあ世の中の大半の男は見込みがないってことにならないか？」

話をしながらも仕事を怠らなかつた彼は、手早くシェイカーを振るとおかわりがなみなみと注がれたグラスを



すつと差し出す。酒に誤魔化され、自分の質問を流されたような形になってバーテンダーを軽く睨んだ。よく見れば、この男も整った顔をしている部類だ。ムラのない灰色の髪に、ややつり上がった瞳、ぞんざいな言葉づかいは出会う場所によっては近寄りがたい雰囲気があるものの、かっちりとした制服と、感情を隠すことのないあけすけな表情が彼の近寄りがたさを緩和している。

「君だってイケメンの部類じゃないか。女に不自由したことのない人間に、僕の気持ちはわからないよ」

噛みつくような物言いがおかしかったらしく、目の前のバーテンがククツと笑う。

「綺麗な男は憎悪の対象、ってか？」

「憎悪とまではいかないけれど、今はそうだね。腹立たしいと思いきそすれ、好意的にはれないかな」

「じゃあ……心変わりした女と、女を攫っていった男。アンタはどっちがより憎い？」

面白がるような男の問いに、アルコールでふわふわした頭で考えをめぐらす。普通だったら、女の心変わりをなじるところだろう。だけど自分の頭の片隅にこびりついて離れないのは、あの男のまなざしだった。愛想笑いの下、隠しきれずにこぼれた値踏みをするような視線、女が自分を選んだ瞬間の憐憫の混ざった勝者の笑み。

「……男の方だ」

あのとときの男の顔を思い返すと、ふつふつと怒りが込み上げる。酒のせいかな感情のゆり幅が制御できず、語気荒く言い放つ。

「彼女を盗られたことはまあいい。本当はよくないけど、僕にも非があつただろうから。けど僕を見下したように笑つたあの男、……思い出すだけで腹が立つ」

「女は許すのに、男は許せないのか？」

「許すも許さないも、二度と会うのなんかごめんだ」

「もし、街中で偶然会ったら？」

「そのときは、自分が何をしでかすかなんて想像もつかないさ」

「へえ。……いい答えだ」

ほの暗い喜びを感じさせる声に、ぞくりと背中が震える。いつの間にか、戯れに質問を投げかけていただけの彼の纏う空気が変わっていた。先ほどまでの口は悪いが愛想がよく、気のいいバーテンダーという印象は跡形もなく霧散し、ニヤリと唇の端を上げる笑う方は、絡め取つた獲物でどう遊んでやろうと思案している顔だ。落ちる寸前の獲物を前に舌なめずりをしているような、そんな毒々しい空気をはらんでいる。

「なあ、オッサン」

蠱惑的な声にめまいがして、身体を支えようとカウンタ―に腕をついた。

「復讐したくはないか？」

「復讐……？」

「そうだ、復讐だ。アンタを見下したような見目のいい男を、組み敷いて、汚してやるんだ」

囁くような声で男が問いかける。

「奥の部屋に男が一人いる。アンタの憎い、とびきり綺麗な男だ。その男を今晚くれてやる。条件さえ守ってくれば、アンタの思うように扱ってくれて構わない」  
何を言っているのだと信じられない思いで男を見つめる。見目のいい男を組み敷いて、汚す。復讐。ぐるぐると頭の中を言葉が駆け回る。

「……どうする？」

「どうするって、そんな……」

非常識なこと、と続くはずの言葉は、男の手にふさがれて音になることはない。

「大丈夫、心配することは何もない。オレも、アイツも全部合意の上でやることだ。あとはアンタが領きさえすればいい」

きつと、楽しいぜ。

選択権はアンタにあると言いながら、諾と答えること

を確信している声音は、誘いを魅力的なものに映し出す。飲みすぎたアルコールは正常な判断力を奪い、誘惑に引き寄せられるように首を振るまでに、さほど時間はかからなかった。

「や、……ああ……っ」

組み伏せた身体が不自然に跳ねた。些細な刺激にすら声を上げ反応する肢体を、上から余すところなく視界におさめる。唇を噛んで声を殺すさまはやけに官能的で、徐々に気分が高揚していく。

首筋に吸い付き、掌を身体のラインに沿って滑らせる。しつとりと汗ばんだ肌は吸い付くような手触りで、骨の一つ一つをたどるようにじつくりと撫でまわす。反応しつとある中心には手を触れず、足の付け根を中心的に探ると、期待した刺激が得られないもどかしさからか、誘うように身をくねらせた。顔を背けた拍子に食んだのだろう彼自身の金髪が声を奪う猿轡のように思え、頬に手を添えてゆつくりと引き出す。薄く開いた唇から見える舌は赤く、小刻みに肩を震わす姿は情欲を煽るものだ。目隠しを取らない限り何をしてもいい。それが交わし



た約束だった。部屋に入り早々、ベッドに寝そべった金髪の男の視界を奪ったバーテンダーは、今頃何もなかったような顔で別の客の相手でもしているのだろうか。すれ違いざまに「精々楽しむんだな」と肩をたたいて部屋を出て行き、ここには自分と目の前の男しかいない。瞳を覆う無粋な布があってもこの男の顔がひどく整っていることは一目で見てとれた。綺麗な男、汚す、合意の上、復讐。告げられた言葉が何度も頭の中でくり返され、むくむくと欲望がわきあがる。

とがった乳首を指で転がすと、男があえやかな吐息をもらす。両手は拘束されているわけではなくシーツをさまよっているが、決して自分に施された布を外そうとはしない。あらかじめ何か言い含められているのだろうか、その従順な様子は自分以外の人間に屈しているようで面白くなく、芯を持ったそれをやや乱暴に押しつぶした。

「……っあ、っ」

弓なりに反った身体は胸を突き出すような形で、大胆な指の動きを助長する。熱を持ちぶつくりと膨らんだ乳首に誘われるようにしゃぶりつくと、ぬるりとした感触に驚いたのか、男の身体が強張る。

「や、や、なに？」

視界が奪われているせいで、感覚だけが頼りなのだろ

う。過剰ともいえる反応にほくそ笑んだ。

舌で転がし、緩急をつけて吸い上げる。思い出したように歯を当ててやると、面白いように身体が跳ねる。空いた手で下肢を探るとそこは完全に立ち上がっていて、透明の蜜をこぼしていた。

「乳首、感じる？」

「やあつ、そこ……しゃべら、ないで」

「ああ、息がくすぐったい？ やっぱり感じるんだ」

唾液でべとべとになった右の胸の飾りに、気まぐれに息を吹きかける。ひくりと震えて身をよじる隙をつき、左側に愛撫を与える。悦樂を与える指から逃げようと上体を逆にひねれば、また右に。ぱさぱさとシーツに散らばる金髪を十分に楽しんだあと、身体をよじるその勢いを借りて、ぐるりとひっくり返す。鋭敏になった乳首や立ち上がったペニスには、些細な感触ですら大きな刺激だ。うつぶせに伏せた身体がシーツにこすれ、「んっ……」とくぐもった喘ぎをもらす。それを見逃さずに「腰を上げて」と命令すると、男はおずおずとだが従い、膝を立てて這う姿勢をとった。

愛撫の手を止めて男の身体を観察する。うなじから背中にかけての流れるようなライン、くつきりと浮き上がった肩甲骨。無駄な肉の一切ない腰回りに、身体に食

い込むような視線を感じているのか、ピクリと動く臀部と……その奥にあるつつましやかな蕾。

すべらかな尻たぶを押し開き、濡らした指を浅く食い込ませる。入り口付近で軽く抜き差しをするのは、これから行うことへの予告のためだ。それを理解したのか、徐々に身体から強張りが解け、閉じた入り口が蕩けていく。程よい頃合いを見計らって一息に奥までねじ込んだ。

「んあっつ！ ……あ、あっ」

ゆっくりと中を探り、徐々に指を増やしていく。粘膜が指にまとわりつく感触が心地いい。感じるところを掠めるたびに、太腿にキュツと力が入る。中が締まり、指の形をリアルに感じたのだろう、男がひととき高い声を上げた。腰が疼くようなその叫びをもっと聞きたくて、弱いところを集中的に責める。そこを抉った何度目かのとき、唐突に男の肘がかくりと落ち、力を失くした上半身がシートに沈む。腰を高く掲げたまま、なすすべなく快楽に耐える姿は、例えようもなく卑猥に映った。

息も絶え絶えと言った様子で、男がねだる。

「もう、や……も……むり」

「……どうして欲しい？」

散々弄った穴から指を抜き、意地悪く問いかけた。失った質量を惜しむようにヒクヒクと後孔が痙攣し、切なげ

に腰が揺れる。

「あ……う……っ」

言葉にするのを躊躇っているうちは、欲しい刺激は与えない。触れるか触れないかのタッチで、ときおり感じるところを弄ってやればいい。酷く感じやすい身体のこの男は、それだけでじきに陥落するだろう。

「ふ、あっ……」

たとえば腰から尻にかけての背中ライン。左より右の方が反応がいいのは実証済みだ。

「ん、やあっ」

膝裏から内腿までをじっくりと撫で上げる。足の付け根は軽く引つ搔くように指を滑らすほうがいい。

「……ひ……ああ……っ」

足の間で開放を待ちわびているペニスは、羽のようになぞるだけでだらだらとめどなく蜜をこぼし、シートにいやらしい水たまりを作る。

「……どうして欲しい？」

ハッキリ言葉にすれば、欲しいものをあげるよ。

子供に言い聞かせるように問いかければ、熱に浮かされたように男が呟く。

「い、れて……中に、入れ……あ、あ！」

「くっ……」



懇願の声を聞き終える前に、腰を掴んで後ろから身体を沈める。待ちわびた刺激に男の背中がザアッと泡立ち、挿入の痛みを逃がすようにのけぞった。

先端を呑み込めば、あとはもう奥に進むだけだ。詰めた息を整えようと肩が上下するのに合わせて、じわじわと埋め込んでいく。中が慣れるまでそのまましていると、焦らされているとでも思ったのか、物欲しげに孔が収縮する。誘いこむような動きに煽られ、自身をギリギリまで引き抜き、叩きつけるように突き上げた。男の手が、縫るものを探してシーツに爪を立てる。

「う……深、……い、いい……ッ」

二度、三度と中を抉るように責め立てる。うわごとのように奥がいいと身悶える身体を押さえつけて……ときに激しく、ときにはわざと与えずに焦らす。過ぎた快楽に泣き叫び、閉じることを忘れた男の口からは、もう意味のない音しか出て来ない。

顔だけではない。身体も、声も、どこもかしこも綺麗な男だ。そんな男が、自分の手で身悶え、痴態をさらす。言葉にならない興奮が身体中を駆けめぐる。

すべてを暴きたてるような動きに細かな痙攣をくり返していた身体が、限界とばかりに大きくわななく。ぎゅるりと中が扇動し、開放を促すように絞られる。

「いつ——ア、アアッ……！」

掠れた悲鳴は長く尾を引き、男の膝が崩れベッドに沈む。絶頂の瞬間の激しい締め付けに逆らうことなく、男の体内に精を放った。自身を引き抜き、余韻を逃がすように大きく息を吐く。

広い部屋に、ふたりぶんの荒い息が大きく響く。欲望を吐き出した解放感に加え、時間が経ち酔いも醒めたのだろう。異様なまでの興奮が冷めて段々とはつきりしていく意識の中、ふと我に返り背筋が凍った。

生々しい感触が残る身体、わきあがる罪悪感。唆されたとはいえ、こうすることを選んだのはまぎれもなく自分だった。目の前の現実には懺悔の言葉が浮かんでは消え、また浮かんでは言葉になることもなく消えていく。その場から動けない自分をよそに、まだ整わない息の中、身体の向きを変えようと男が身を起こした。

「あ……」

瞬間、結び目が緩んでいたのか瞳を覆う布がはらりと落ち、暗闇の中、視線が絡み合う。

隠されていた相貌を目の当たりにし、驚きで固まった。目隠しをしていたときから整った顔だということにはわかっていた。けれど、まさかこれほどとは思えない。涼やかな目元、すつきりと通った鼻筋、街中ですれ違えば

誰もが振り返るような美青年だ。けれど情事後であるからだろう、上気した頬と濡れた唇がいやになまめかしい。息をのむほどに美しい男だった。

逃げるように部屋を出ていく男の後ろ姿は、もはや黄瀬の興味をそそるものではない。行為を終えてしまえばそれはセックスの相手ですらなく、ましてや視界を隔っていた布がない状態では意味がないのだ。

……彼にとつても、自分にとつても。うっとり目を閉じ、先程までの感触を反芻する。

こちらの反応を逃さず、的確に与えられる刺激。悦がる身体を押さえつけ、加えられた執拗な愛撫、高ぶった身体に決定打を与えずに焦らし、懇願の言葉を引き出す手管。今宵の相手はなかなか上等だった。乱れる自分の姿は、きつと彼の目を十分に楽しませたことだろう。

視線をさまよわせ、ある一点で止めた。ゆるりと弧を描いた唇が笑みの形をかたどる。

「ねえ、……アンタは楽しんだ？」

気怠げな様子はそのままに、とびきりの流し目で問いかける。情事の痕跡を見せつけるように、ゆっくりと足

を開いていく。部屋の奥にある作り付けの棚。ベッドがよく見える位置にとインテリアを装って仕掛けられた一台のカメラ。その向こうにいるはずの、ひとりの男に。

男に抱かれている間、彼がどんな顔をして自分を見ているかを想像する。それだけで、この身体は簡単に昂る。

他の男に抱かれるさまを灰崎が見ていることを黄瀬は知っていた。知っていて、見せつけるように彼が用意した男と絡む。そんな黄瀬を、灰崎もまた知っているのだ。

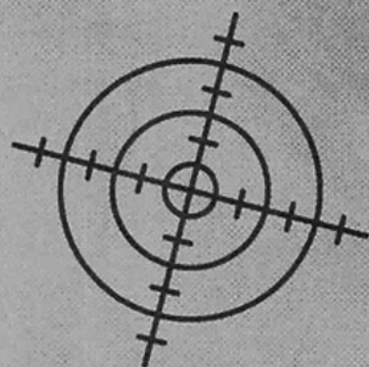
「ショーゴ君の、ヘンタイ」

楽しいに悪態をつきながら黄瀬は自分のペニスに指を伸ばす。彼によく見えるように身体の向きを変え、膝を自身の方へ引き寄せる。

目を閉じれば、無機質なカメラごしに全身を舐めまわすような視線を感じて胸が高鳴り、熱の引いたはずの身体が再び火照り出す。

ああ、次はどんなふうにも乱れてみせよう。





**LOCK\*ON**



ああっ



…あ  
あっ

や、  
あん



…ふふ



ちよっとお  
くすぐりたい  
ってば…

あっ





...暇つぶし?

こんな所で何してんスカ



...あんたに言われたくねーし



お前こそ何してんの。授業中だろ



俺ここでよくサボるから



寝るにはサ...



ここいいなあ  
授業に使われなから誰か近付かぬし





…無視すんなよ



つかお前  
2年の黄瀬だろ



さっさと  
出たって欲しい  
んすけど

…なに？













やっぱりそうだ

…てめえ

なんでこんな所から  
コソコソ見てんの？

…いくら女にも  
モテるつつても

男に告る  
勇氣はない？

…そりやそうか

嫌われるのは  
怖いもんなあ

…可哀相に

嫌だ

怖い

怖

…なん  
コイツ





しー。

暴れんなよ

っはなせ!

はな

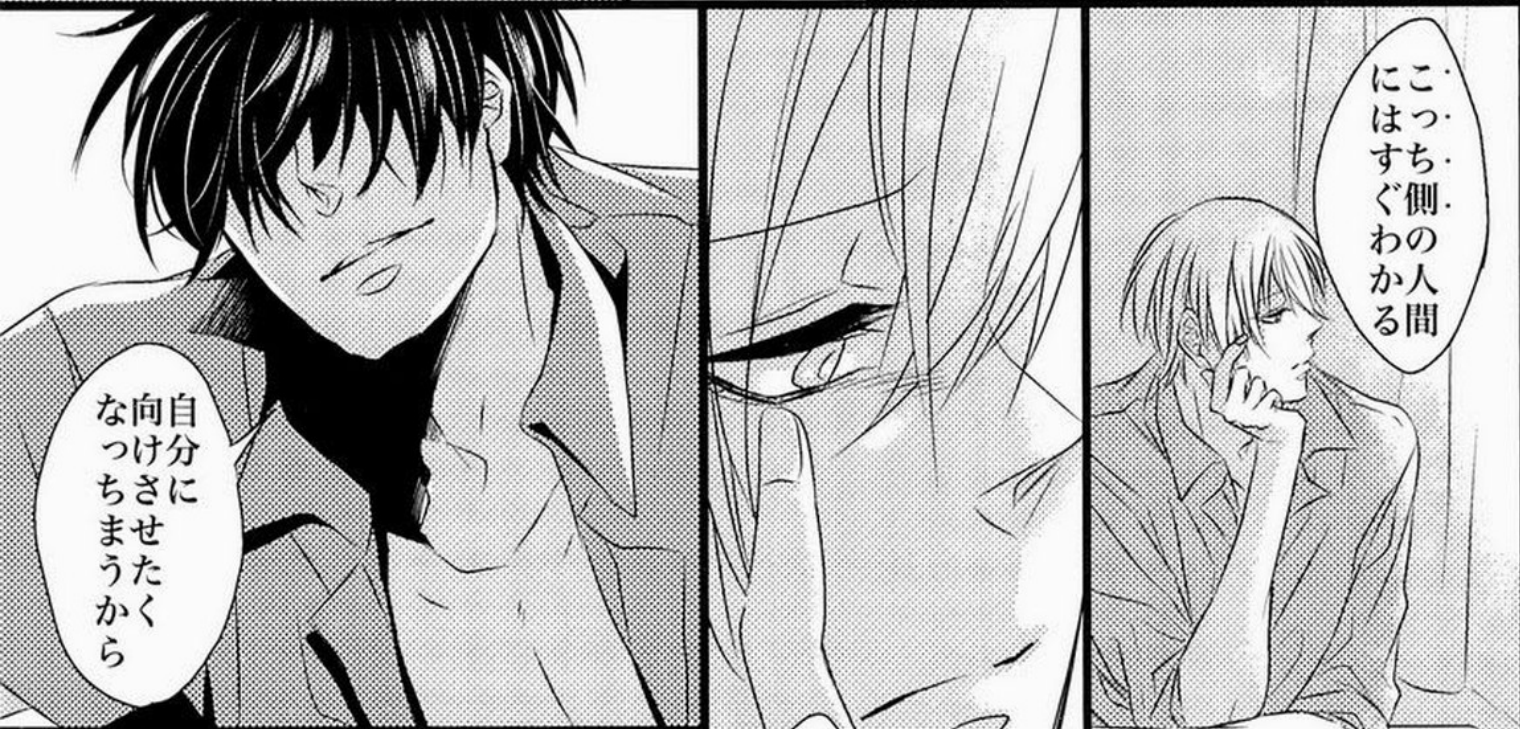


…お前

気が付いた  
方がいいよ

アイツを  
見る目が  
メスと同じだ  
物欲しそ

…っ



こっちは  
すぐわかる  
側の人間

自分に  
つけさせたく  
ら  
な  
つけ  
ち  
ま  
う  
か  
ら

…その目を

…でも



アイツが  
お前の目に  
気は

ねえだろ  
うな





た：言われなく  
た：つて

そんなの、  
もうとっくに



…っふ、  
んっ



：つってもコレは  
ちよつと感ずすぎ  
だけど

んっ！

お前はじめて  
じゃねえの？



男がヨくなれるトコは  
こつちにもあるんだぜ



んうっ…



んっ、



キモチイ  
だろ？







はっ…どけよ  
クソったれ

ぶつとぼす  
ぞ…!!

…ふ、



っは、はあっ

っ



んっ…

ふ、



うあ、あ

あ



いっ…

本当  
可愛いなお前



あっ

あんまりデカイ声  
出すとさすがに誰か  
来るかもよ?

あ

い、やつ…  
あっ



アイツに



……っ

そうだ  
聞きよ  
みよ



やめろ嫌だ

嫌だあ!!

っ、や

やめ

.....!!



ちがう

気付いて思っ  
て欲しくない

あの人の  
そばにいたい

軽蔑される  
怖い

...ちが



...本当は

はあっ

はし

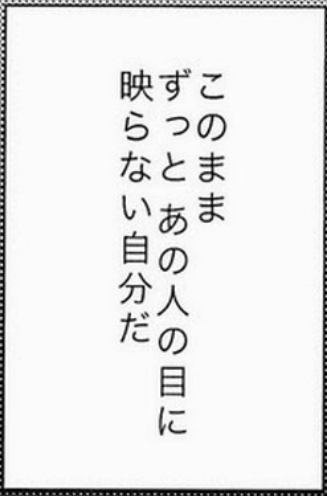


気付いて欲しくて  
たまらないくせに





……ちがう




このまま  
ずつとあの人の目に  
映らない自分だ



本当に、  
怖いのは

怖い



気付かれないことなく  
殺してしまおうことだ

……お願い  
だから

俺を見て……

それが、なにより……

## 【売れっ子モデルの性事情】

黄瀬涼太を知っていますか。そう問われたら、大半の人間は、モデルの黄瀬涼太と答えるだろう。確かに黄瀬は、メンズファッション誌の専属モデルとして活躍しており、売り出し中のモデルとして世間から脚光を浴びている。メンズファッション誌でありながら、雑誌を購入する女性も多い。トーク番組にも時折出演し、モデル業だけでは垣間見ることの出来ない、黄瀬の年相応のあどけなさや、屈託のない笑顔や、喋ると気さくでどこか犬っぽさすら感じさせる口調、黄瀬が夢中になっていると言うバスケットを披露することもあり、その時の真剣な眼差しに「男」を感じ、モデル業とは違うその二面性に、夢中になる女性が続出している。

モデルをしているだけあり、顔立ちもきれいで、長い睫毛に甘そうなちみつの瞳、同じ色をした髪はいつも滑らかで、健康的な肌の白さが眩く、一見華奢そうにも見えるが均一にバランスよく筋肉もついており、もちろん身長もある。男たちはこぞつて、これほど同じ人間でありながら分け隔てをしてもいいのか、と憤るばかりだ。

だが、モデル黄瀬涼太はあくまで表の顔だ。裏では黄瀬は『ハメれるモデル』として活躍している。その名の通り、黄瀬はモデルとして成功しているにも関わらず、裏では会員を募っては複数と乱交しているのだ。会員制であり、もちろん表立って会員を募っているわけではなく、会員サイトを見つけるのは至難の技である。会員になるための一番の必須条件として、誰にも内容を漏らさないこと。それが大前提として提示される。この便利な文明利器が溢れている世の中、ネットで調べても黄瀬の裏での活

動は一切書き込まれていない。

だが、黄瀬は裏での活動の幅も広げているのは事実。会費は月五千元。月に一度、会誌代わりにイメージビデオのようなものが送られてくる。誰が撮影しているのかわからない、おまけに場所も様々な場所であり特定は困難であるが、送られてくるDVDには黄瀬の自慰行為や、擬似性器での口淫、コスプレ、淫語、撮影者とのハメ撮り、などその内容は過激なものばかりだ。また、三ヶ月に一度開催される、あらゆるショーにも抽選で当選すれば参加できる。ぶっかけショーであったり、射精したばかりの精液を目の前で飲んでくれるショーであったり、ガラス一枚隔てた場所でマスコを被った男たちとの生ハメショー鑑賞であったり、とそれらの内容も凝ったものばかりだ。

これで月五千元ならば安いものである。とは言うものの、それだけでは『ハメれるモデル』とは言えないだろう。会員には、VIP会員というものも存在しており、会費は月に三万円。だが、初めからVIP会員になれるわけではない。五年間通常会員であることが原則として義務づけられており、五年経過した頃に、VIP会員になるための案内が届く。通常会員以上にVIP会員の規則は厳しく、VIP会員なるものが存在していることそのものも、通常会員であろうとも知られていない。それこそ極秘扱いなのだ。

今日、まさに極秘中の極秘であるVIP会員への案内が届いた男は、安月給の中からの三万円がどれほど貴重なものであるかわかっていながら申し込みを渋る理由が見つからず、申し込みを決定していた。黄瀬が裏で乱交まがいのことをしていると知ったのは、本当に偶然だった。恐らく事務所側が目を光らせているのだろうが、時に会員を辞めた者などがネッ



トに書き込むことが希にある。会員を辞めた後であろうと、他言無用であることは初めから記載されているのだが、あの黄瀬が、となると誰彼にも言いふらしたくなるのは仕方ないことだろう。そのようなスレッドが立ち上げられるや否や、すぐに削除された挙句に、社会的制裁が下されている、と会員になり男は聞いたのだが、本当に偶然、その書き込みを見てしまったのだ。

やはりすぐに削除されてしまったが、黄瀬に対し、邪な思いを少なくとも抱いていた男は、黄瀬への嫉妬心からの誹謗中傷のための程度の低いイタズラだろうと思いつつも、調べずにはいられなかった。大多数の人間が、そのようなスレッドを見たところで信じたりはしないだろう。男もその内の一人だった。黄瀬はあれだけの人気を誇っていないながら、浮いた噂の一つもなく、そういうところもまた黄瀬の人気を裏付けていた。だが、男はついに探し当てた。ようやく見つけた頃には目を跨いでおり、男はなりふり構わずすぐに会員申請を送った。それから五年。これまで参加出来たショーは、ぶっかけショーや避妊具を装着してのフェラチオ、オナニー鑑賞、放尿ショー、など誰が企画しているのかはわからないが、同じショー内容であった試しがない。VIP会員があるとは、風の噂で聞いた程度で信憑性もなかったため、信じてはいなかったが、こうして案内の便りが来たのだから間違いないだろう。

男は、住んでいたアパートから更に安いボロアパートへと引っ越すことを決め、月三万円を払うために、お盆に帰省すると両親に話していたが、正月に帰省するから、と取りやめることにした。そのことに罪悪感がないわけではない。もう結婚し子供がいてもおかしくはない年頃だ。それな

に彼女がいるでもなく、安いボロアパートで暮らし、黄瀬に貢いでいる。だが、それほど黄瀬にのめり込んでしまっているのだ。今更後戻りは出来ない。

正月にはちやあんと戻ってくるんよ、元気でおりよ。そんな母の言葉に胸を傷めながらも、VIP会員となり初めての案内が届き、男は胸を躍らせていた。通常会員同様、DVDが同封されており、それとは別に某所でのパーティーの案内も同封されていた。ただのパーティーではないことは一目瞭然だ。一ヶ月後の土曜日と日曜日に開催されるようで、場所はそれぞれ別の場所だ。男は自宅から近い方を選び、参加する旨を折り返し送り届けた。その日から、男は自慰行為を禁じた。

そうして、当日を迎えた男は、なるべく小奇麗な格好をしていくべきだと数少ない友人から黄瀬も雑誌で着ていたという服を借り、指定された建物へと向かっていった。時間厳守とあり、早めに家を出たものの、男は幾度もその建物へと足を運んでいる。道に迷わないために最短ルート調べ、自宅から何分で到着するかとストップウォッチで念入りに確かめていた。このままいくと、十分は早く到着する見込みだ。

妙な緊張感に襲われていたが、睡眠不足で勃起しない、という事態は避けたかったため、睡眠導入剤を服用し、十時間は寝たため目はしっかりと冴えている。そうして、予定通り十分前に到着すると、建物内には屈強そうな男二人が立っており、入念なボディチェックをされた後、スマートフォンの画面に指示された。撮影機器などは予め保管されるようだ。家を出る前にこれでもかとシャワーを浴び、体を洗ってきたのだが、シャワーームでシャワーを浴び清潔にするよう言い渡され、男は再度、念入り

に体を洗った。

脱衣場で、数名の男と鉢合わせた。同年代の男もいたが、年齢層はてんでバラバラだ。ここに居合わせている男たちは、全員がVIP会員であり、黄瀬のことを陵辱するために集まっているのだと思うと、全身を緊張が走った。ここににいる男たちは、生活が苦しくなるうとも、月三万円の会費すら惜しくないほど、黄瀬へのめり込んでいる者ばかりだ。誰も言葉を交わさないが、奇妙な一体感のようなものを男は感じていた。

そうして、男たちはだだっ広い部屋へと集まっていた。部屋の中にはおざなりにマットが敷かれており、集まっている男は十数名ほどか。下着のみで集まるような言われていたため、それぞれが下着姿という出で立ちだ。小洒落た格好で来る必要などどうやらなかったらしい。アダルトビデオで見たことのある乱交ものに、自分が参加することになるとは夢にも思わなかった。おまけに相手はあの黄瀬涼太だ。世間を賑わせており、女性が虜になっているあの、黄瀬涼太だ。黄瀬の彼女になりたいなどと夢見る女性も多いだろうが、裏でこれほど卑猥な事をしているとは想像だにしないだろう。

ほどなくして、周囲がざわめき始める。黄瀬がもうすぐ来る、と責任者らしき男が告げたからだ。部屋には、受付にいた屈強そうな男一人と、責任者らしき男がいる。

誰もがドアの方へと視線を向け、固唾を飲んで待つ中、ついにドアが開かれ、黄瀬が姿を見せた。男たちが下着姿であるのとは対照的に、黄瀬はしっかりと衣服を纏っている。一般人が、いくらお金を払っていると見えど、黄瀬が至近距離にいる、という経験が出来る人間は本当に限られてい

るだろう。十数名の下着姿の男たちを見回すと、どこか照れくさいのか黄瀬は小さくはにかんだ。

「いっぱい来てくれて、嬉しいっす。今日はよろしくお願いしますっ」とても、そんなことをしているようには見えない。黄瀬は、ぺこり、とお辞儀をすると、部屋の中央に敷かれているマットまで歩を進め、座り込んだ。通常会員では、まず黄瀬に触れることさえも法度だったため、避妊具装着でのフェラチオの時でさえ、透明な板に穴が開いており、そこから性器を出してフェラチオしてもらおう、という徹底ぶりだ。透明な板はそれこそ大活躍していた。だが、黄瀬と男を隔てるものはもう何も無い。

「それじゃ、始めるっすよ、みなさん」

その合図と共に、黄瀬へと群がる男たち。だが、男は一步出遅れてしまいい、群がった男たちで黄瀬の姿はすぐに隠れてしまった。だが、圧倒されていいては、ここにまで来た意味がない、と男は出遅れはしたものの、黄瀬のいるマットの付近へと座り込み、ひよこりと群れから顔を出している右足を掴むと、履いていた靴と靴下を脱がせた。

初めて黄瀬に触れた瞬間である。それが例え足だろうと感慨深いものがあり、男は黄瀬の右足を手にし、頬を摺り寄せた。きれいに切り揃えられている爪、体毛が薄いか足の指にほとんど毛はなく、足の甲に浮き出ている血管にさえ興奮させられる。下ろしたばかりの下着は、もう窮屈そうに押し上げられていた。そして、男は脱がせたばかりの足へと鼻を摺り寄せると、すん、と鼻を吸り黄瀬の足のおいを嗅いだ。どれだけきれいな顔立ちをしており、完璧な体型をしていようとも、靴下と靴で蒸れた足のおいはやはり独特なものがあって、黄瀬もその例外ではない。



「ん、や……っ、だれ、スカ……足、かいで……んっ」  
「っ！」

黄瀬が反応している。自分のしていることに。そう思うと、興奮が一気に増していく。遅れを取ってしまったから、と顔を出していた足を手にしただけに過ぎないのだが、黄瀬にとっては予想外の展開だったのだろうか。男は更に、指と指の間へと鼻を摺り寄せ、においを嗅ぐ。酸っぱささえ感じさせるそのにおいに、男はたまらない気持ちにさせられる。やはり黄瀬も同じ人間なのだ。

どうやら、衣服を剥ぎ取られているのか、群れの中から着ていた衣服が投げ捨てられる。

男たちの荒い息だけが部屋へと響いている。誰もが本能に従い動いているのか、そこに言葉はない。異様な光景であることに違いなかったが、この雰囲気はアテられているのも事実だ。足のおいを嗅ぐだけで満足など出来るはずがない。既にガチガチに張り詰めている性器は、自慰行為を禁じていただけあり、今にも暴発寸前だ。

十数名いる中には、リーダーシップを発揮する男が一人はいるもので、群がって押し倒された黄瀬の体を起こすと、男たちが一斉に黄瀬を取り囲み、今度は乗り遅れることなく流れに従い、男も黄瀬を囲んだ。ちょうど黄瀬の右斜めぐらいの位置だ。

「もうみんなギンギンっスね。オナ禁してきたんスカ？」

黄瀬を取り囲む男たちは、誰もが勃起しており、下着を窮屈そうに押し上げている。慣れているのか、黄瀬は物怖じすることなく、可笑しそうにそう言うのと、目についた男の方へと摺り寄ると、一気に下着をずり下げた。

途端に、弾けるようにして勃起した性器が露となる。下手をすれば、顔を近づけていた黄瀬の顔を、性器でぶっていたかもしれない。黄瀬の言う通り、自慰行為を禁じていたためだ。

「あ……もうこんなにカウパー垂らして、やらしい、スね……」

黄瀬の息が上がっていく。今にも腹にひつつきそうなほど勃起している。逞しい男根にたまらない気持ちにさせられたのだろうか。ぐく、と生唾を飲み込み音さえ聞こえる。物欲しそうにはちみつ色の瞳を揺らす黄瀬。初めこそ、事務所からの斡旋により、こんな真似をさせられているのだと思っていたが、とても無理矢理させられているようには見えない。

黄瀬はどうしようもないスキモノなのだ。何故そんな風になってしまったのかはわからないが、男を唾えるための淫らな体をしている。だから女性との熱愛報道が取りざたされることもない。何故なら、黄瀬の体は男を欲しているから。事務所としては、売り出し中のモデルが男漁りに繰り出す姿を撮られるよりも、こうしてトップシークレット扱いの会員制として、言わばいつでも男とやれる状況を作っておけば、黄瀬がヤリマンだとネット上で噂されたところで根も葉もない噂だと一蹴できる。

「みんなも……出して、早く……っ」

急かされるようにして、男たちが次々に下着の中から性器を取り出す。それだけで、黄瀬は感嘆の声を漏らし、熱っぽい吐息を零す。そうして、目の前にある男の性器に、黄瀬は躊躇うことなくしゃぶりついた。ただではなく、両の手を使い、別の男の性器も扱き始めた。

「んぐ、う……ん、ふ……ん、は……ん、ふっ」

避妊具越しにフェラチオされたことはある。だが、やはり生で感じる黄

瀨の舌使いは凶悪で、口腔内の粘膜に包まれ、頬を窄めて吸い付かれるだけで、男は思わず呻いてしまう。両手は忙しなく男たちの性器を扱きながら、黄瀬はじゅぽじゅぽとわざと音をたてながら、顔を上下させる。喉奥にまでいざなわれ、性器を口いっぱい頬張ったその姿は、モデル台無しで何とも不細工に歪められている。

男はたまらず、黄瀬の髪へと指を潜らせ、後頭部を押さえつけた。自慰行為を禁じていただけであり、本当にあっけなく男は達していた。情けないほどに早かった。自己記録最短と言えらるだろう。

溜めに溜めていた精液を、黄瀬の口内へと吐き出す。だが、誰も男の早漏っぷりに揶揄する者はおらず、黄瀬も嫌悪するでもなく、その濃厚な精液を受け止めている。全てを口内へと吐き出すと、男はずりりと性器を口内から引き抜くと、黄瀬は精液を味わうように、くちゅくちゅと咀嚼すると、男を上目で見つめながら、喉仏をゆっくりと上下させ、飲み干した。それを証明するかの如く、小さな口を開けると、黄瀬は妖艶な笑みを浮かべて、濡れた唇をへろりと舐めた。

「今日のためにいっぱい溜めてくれてたんすか？すんごい濃かったっ……んぐつ、ふ、うう、んっ」

黄瀬が言い終わらない内に、口腔内へと別の男の性器が挿じ込まれる。そう、ここにいるのは黄瀬を凌辱するために集まった男たちだ。会話を樂しむ余裕などない。黄瀬もまた、それらを楽しんでるため、すぐに口淫へと夢中になっている。半ば強引に啞えさせられたと言っのに、愛おしそうに頬張り奉仕している姿は、健気にも見え、我慢の出来ない男たちは両手も塞がってしまうと、黄瀬の滑らかな肌へと性器を擦りつけ始めた。ま

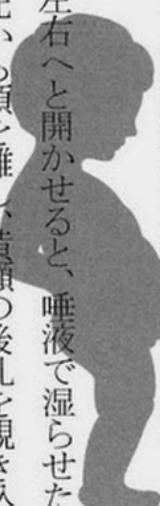
た別の男は黄瀬の胸元へと舌を這わせ、薄桃色の突起をねぶる。一度果てたとは言え、一度きりで収まるはずもなく、男はもう片方の突起へと指を這わせた。

男の乳首など黄瀬でなければ興奮材料にすらならないだろう。だが、黄瀬の胸元で愛らしく主張している突起は、そこはかとなくいやらしく、男の愛撫に期待し、つんと尖っている。人差し指で突起をなぞるだけで、黄瀬の体が小さく震える。敏感なのだろう。

たまらず男は胸元へとむしゃぶりついた。周りの皮膚ごとその小さな突起へと吸いつく。黄瀬の口からは、くぐもった喘ぎ声が漏れ、体がびくびくと反応を見せているところを見ると、感じていることは明白だ。口に含んだ突起は仄かに甘く、手で黄瀬の体をまさぐり下腹部へと手を伸ばした。

下着の中へと手を忍ばせると、黄瀬は下着の中をぐしょぐしょに濡らしていた。黄瀬の性器からは、とろとろと蜜が溢れ、男が下着の中へと手を潜らせたのを見ると、別の男が下着ごと衣服を剥ぎ取った。露となる黄瀬の性器は、グロテスクさはなく、陰毛も体毛が薄いため控えめで、同じ男とは思えない色と形をしていた。それこそ今、黄瀬を取り囲んでいる男たちの性器は、剛毛な陰毛へと覆われており赤黒く反り返っているが、黄瀬はそうではない。これまで男も、放尿シヨールや黄瀬の自慰行為で目にしたことはあるが、同じ男でありながら、黄瀬の性器はかわいいと形容したくなるものがある。

だが、別の男は黄瀬の膝を掴み、左右へと開かせると、唾液で湿らせた指で後孔へと指を這わせた。男は胸元から顔を離し、黄瀬の後孔を覗き込





んだ。それだけで、触れてもいない性器がどくん、と音をたてて膨張する。

排泄機能しか本来ならばないはずの後孔は、とてもこれまで幾度となく男を受け入れてきたとは思えないほどの小さな窄まりで、緩んでいる様子もなく色もきれいだ。指でなぞられるだけで、ひくひくといやらしく収縮を繰り返す、まるで男を誘っているかのようだ。黄瀬も、口だけでは我慢が出来なくなってきたのか、精液や先走り、唾液で顔中をべとべとに汚したまま、マットの上へとごろりと寝そべり、大腿部の裏へと手を添えると、ぐい、と持ち上げた。そのまま両手を尻の方へと回し、黄瀬はゆつくりと周りを囲む男たちを見渡すと、くばあ、と左右へと後孔を開いて見せた。

それだけで周囲が無言のままだが色めきだち、男たちの視線が一斉に集まる。見つめられるとたまらないのか、黄瀬はふるりと体を震わせ、甘い吐息を漏らした。

「ん、ねえ……おえの、だらしなめすまんこに、はやく、ぶちこんれえ……」

おおそモデルの口から発せられた台詞とは思えず、男は少なからず絶句するが、興奮しているのも事実だ。雌の顔つきでだらしなく男を誘う様に、売女と罵ってやりたくなる。何故、これほどスキモノのくせにモデルなんていうおキレイな仕事をしているのか不思議になるほどだ。男を唾えたいのなら、こうして毎日男に股を開いておけばいいものを。むしろ便所に縛り付けてやっても黄瀬の体は悦ぶだろう。肉便器の方がよっぽどお似合いだ。

黄瀬の下着をずらした男が、我先に、と黄瀬の体を貫いた。解してもい

ないそこは、準備を前もってしてきたのか、とろとろにとろけていようだ。

「ひ、ああ、あつ、あ、あ、ああつ……やあつ、あ、はげし……ひつ」  
無遠慮に後孔がめりめりと押し広げられたかと思うと、男は無我夢中で腰を振り始めた。体を大きくしなせ、黄瀬の口からひっきりなしに啼き声が漏れる。アダルトビデオさながらの激しいピストンに、周りの男たちも思わず見入ってしまうほどだ。がくがくと揺さぶられる黄瀬の体。きれいな金糸の髪がマットの上で乱れ、ただただ啼かされているが、快楽を得ていないわけではない。突き上げられる度に漏れる嬌声は決して苦痛を帯びてはおらず、黄瀬の長い両足はがっちり男の腰をホルドしているからだ。

「あ、ああ、あ、つひ……ぎ、ああつ、あ、あ、こわれ、ひやうう……つ、しゅ……いい……あ、ああ、あ、あつ、やらああ、あ、あ、もつとお……つ」

下品だと思った。きれいな顔がぐちゃぐちゃに汚れながらも、ひいひいとよがる姿はあまりにも下品で、だからこそ言い様のないものが込み上げてくる。ここに居るのは、モデルの黄瀬涼太ではない。ただの男の慰み者、性欲処理のための便所だ。この裏での行為が、黄瀬の裏の顔だと思っていたが、そうではない。モデル業こそが黄瀬の仮の姿だ。

なんて浅ましいのだろう。こんな行為に溺れながらモデルとして若いながらも成功を収めている。恥ずかしくはないのだろうか。よくも世間に顔向け出来るものである。便所のくせに。

何故か沸々と怒りのようなものが込み上げる。黄瀬のあまりにも浅ましい姿に、これ以上ないほどの興奮を得ているのも事実だが、黄瀬を蔑む

心に苛まれ、男は先ほどよりも性器を硬く張り詰めさせていた。

「あ、あああつ、あ、いくつ、いいぐう……っ、なかにっ、らしてええ……っ、あ、あああつ！」

黄瀬は甲高い声をあげると、体を痙攣させながら果てていた。男もまた、黄瀬の中へと精液を放っており、何度か腰を打ち付けると全てを吐き出したように、性器を引き抜いた。下腹部に熱い精液を感じ、黄瀬は恍惚とした表情を浮かべ、痙攣が止まらないように、ひく、ひく、と体を震わせている。半開きになったままの口からは、だらしなく唾液が垂れ、みつともない。だが、黄瀬は気にも留めていないように、男は普段からは想像も出来ない積極さで、黄瀬の足を掴むと、自身の方へと体を引き寄せた。

そして、黄瀬の上へと覆いかぶさると、物欲しそうな顔つきで男を見つめる黄瀬と目が合った。誘うようにして下唇をちろりと舐める仕草は、まるで計算され尽くしているかのようだ。

男は、先ほどまで男を啜えこんでいた後孔へと、怒張したペニスを一気に挿し込んだ。性経験は乏しいと言えど、経験がないわけではない。片手で足りる程度しか経験はないが、これほど無遠慮に挿入したことなどない。

「ひぎいつ、あ、ああ、あ……っひ、あ、らめつ、ふといの、やらあ、あ、あつ」信じられないほど、狭くキツイ黄瀬の中に、男は思わず眉間に皺を寄せ耐える。だが、肉壁が愛おしいように性器に絡みつき、離れない。ぎりぎり、と黄瀬の爪が、男の肩や二の腕へと食い込む。予想以上の衝撃が、黄瀬の体を襲っていた。

だが、黄瀬の体を気遣ってやる余裕はない。ましてや黄瀬は便所だ。多

少の無体を強いても構わないだろう。と、男は爪が更に食い込んでいくのもお構いなしに、抽送を始めた。

「ひ、いあ、あつ、ああ、おくう、おく、きてううっ、やあ、あつ、ごりごりつてえ……あたつてううっ、しよこつ、しゅごいい、しゅごいからああつ」

男の性器は、確かに太さもあり、長さもあり、奥まで腰を押し進めると、ごっ、ごっ、と最奥へと到達しているのがよくわかる。下腹部が押し上げられるような感覚だ。突き上げられる度に、性器の形が浮き出そうなるほどであり、黄瀬は驚愕に目を見開き、白目を剥く。

だが、男は容赦なく、黄瀬の両足を肩へと乗せると、更に黄瀬へと体重をかけ、のしかかった。声にならない声があがり、ついに男の皮膚から血が滲み始める。

「ひ、いぎつ、あ、あつ、あ……も、しんらうっ、しぬうっ、おかひくなるううっ、も……ちんぽ、ずぼずぼしないええっ！」

本格的に泣き始める黄瀬だが、誰も男を止めようとはしない。基本的に黄瀬の体に傷さえつけなければ、何をしてもいい、というのがルールとなっている。呂律の回らない状態で、黄瀬は絶叫する。

逃げを打とうと本能的に体が動くらしいが、男はがっちりとして黄瀬の体を押さえつけ、激しい動きで黄瀬を犯す。まさに物のように乱暴に、黄瀬の体を扱っていたが、そこに罪悪感や芽生えていなかった。自分の中にこれほどの凶暴性があったことに、驚きを隠せない。黄瀬のはちみつ色の瞳からは、ぼろぼろと生理的な涙が溢れては零れ落ち、涙に濡れた長い睫毛が何度も瞬く。こんなにもきれいな瞳をしているのに、黄瀬は穢れている。「ゆるひて……え、あ、うぐ、いあ、あつ、あ、ああつ、ひ、おねが……あ、ああ



つ、あ、もお、おかひぐなううつ」

もう爪を立てる意欲さえないのか、だらりとマットの上へと放り出される黄瀬の両手。焦点の合わない瞳は、ぐるん、と白目を剥いたままだ。周りにいる男たちも、圧巻されているのか、身動き一つ取れないようだ。男は、最早力の入っていない黄瀬の体を好きに揺さぶると、先ほどの男の痕跡を消すかのように、勢いよく黄瀬の中へと射精した。

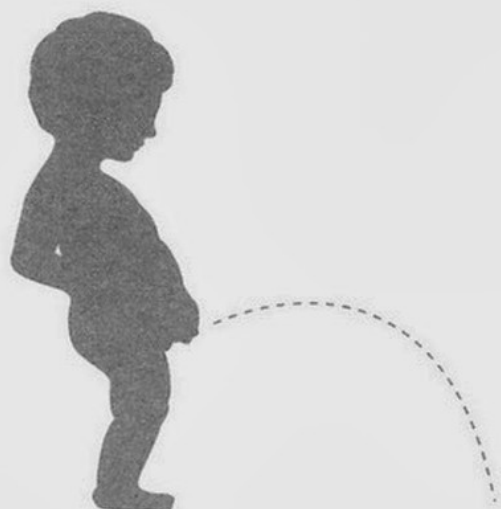
中で射精された感覚に、黄瀬は思わず無意識に失禁していた。どうやらあまりの衝撃に、萎えてしまっていたらしい黄瀬の性器から、ちよろちよると排尿が溢れ、流れていく。どうやら意識が彼方へいつてしまっているのか、自身が漏らしていることにさえ気づいていないらしい。

ようやく排尿が止まった頃に、男はズルりと性器を引き抜くと、後孔はぽっかりと大きな穴を開けており、カエルの解剖のように足をおっ広げたまま、逆流してきた白濁色の液体が、ごぼ、と溢れた。男は、得たことのない清々しさを手にしていた。体も心も満ち足りている。不思議な高揚感に包まれていた。

黄瀬涼太は、世間ではモデルとして今も世間から注目されているが、本来の姿は、ただの便所だ。その正体を知る者は少ない。今日も男は、便所としての黄瀬涼太と会う。あれ以来、すっかり男のペニスの虜になってしまった黄瀬は、男の姿を見るなり濡れた眼差しを向け、股を開くようになった。

もういつそ、声を大にして、公の場で宣言してもいいだろう。モデル黄瀬涼太は、男たちの肉便器なのだ、と――。

END



気持ち悪い

それじゃあ  
挿れるよ  
黄瀬くん

やあ

うあ

あの人以上のものが  
入ってくる感覚に  
吐き気がする

どっどっ?

あー…やべえ  
俺の女より  
具合いいわ

もう  
いきそう

早漏かよ!

最悪だ

なんすか  
アンタ達

こんな手  
呼び出し





コイツの女が  
お前に入れ込んで  
迷惑してんだよ

モデル  
だからって  
ちよーし  
乗んなよな

はあ?!

んなの  
知らねーし  
フが誰?

アンタが  
女つかまえて  
おかねえのが  
悪いだろ

オレ  
急いでるんで

青峰大輝と  
会う約束か?

?!



え...?

黄瀬くん  
これなーんだ?

.....!!



まさか女に  
モテモテの人気  
モデルの黄瀬くん

男の恋人が  
いたなんてな

週刊誌やネットに  
この写真流したら  
どーなるかなあ?  
すごいスキャンダ  
だよ



……何が望み  
なんスか？

暴力？  
それとも金？



大好きなバスケが  
出来なく  
なっちゃうんじゃない？

青峰卒業したら  
プロいくんだっけ？  
問題になったら  
どうなるかな？



うん  
まあ  
それもいいけどさ

それよりも

さあ



ほらほら  
黄瀬くん

俺にも  
フェラしてよ





うっはっ  
やっぱこの顔  
たまんねえ

お前  
ホモかよ!

違うっつーの

っーか青峰も  
イイ趣味してる  
よなあ

お前らと  
一緒にするな...

ん

んんん



っ!!



ああ  
やっとな  
効いてきた?

さっき使った  
ローションに  
ちよっと気持ちよく  
なるもの入っててさ

せつ

せつ



な...に...?

...あ

はあ...

どうせなら  
黄瀬くんも  
楽しめたら  
いいと思って、ね？

俺ら  
優しいっしょ？

あははっ

サア

なっ

ふ…

ふざけん

ああ

ゴゴゴ

あ…あ

あ

あいの

やっべ  
すっげえ  
絞めつけ！

ひゃ

やあ

しゅる  
しゅる

しゅる  
しゅる

黄瀬くん  
気持ちいいの？

チンコ勃って  
きてるよ









ひびひび

ズルッ

ト...



ゼン

おは

かわいー

やべ  
俺目覚めそう

今回だけって  
思ってたけど  
こんな名器一回だけ  
なんて勿体ねーな



だなあ

黄瀬くんもさ

もっと  
俺らと一緒に  
楽しみたいでし



ゼン

あ  
ああ  
ああ

ゼン

びゅるるる

いやだ

!!

X

X







心配してくれて  
ありがと  
青峰  
っち



大丈夫



……黄瀬?

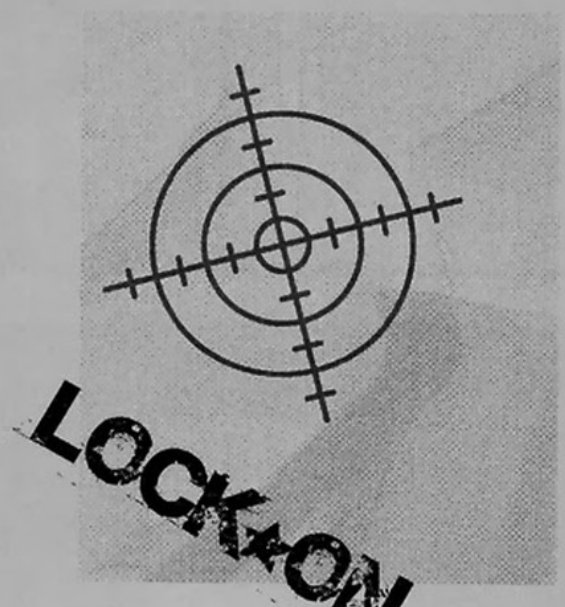


好きっすよ……

オレは

大丈夫だよ





□□

俺には、誰にも言えない秘密がある。

それは、俺にとって最重要項目の秘密。

そう、誰にも言えない特別な性癖がある…

「じゃあ、また来るっスね、青峰っち」

「お、おう」

何時も通りの笑みを浮かべて、彼に微笑みかければ、褐色の手が白い頬に触れたと思うと、唇に温かいものが当たった。

それは彼なりの、情事後の甘い優しさだ。それが彼にとって、精一杯の愛情表現であるという認識が出来たのは、本当に近い最近だ。

ココ

「ん…も、もう、突然キスとかやめて欲しいっス…」

「あ、悪い…」

「まあ、いいっスけど…」

青峰大輝と黄瀬涼太。

この二人が付き合うようになったのは、つい最近のことだ。

甘い甘い、まるで子供のような恋愛をしている。まあ、実際は子供だけけど…。いや、子供とは言え、関係はキスだけでは終わらず、互いの身体を繋げ合っているような仲でもある。

「嘘っスよ。すっげえ、嬉しい」

「…：…：そうかよ」

ぶつきら棒に振舞う青峰大輝に、黄瀬涼太は心を奪われっぱなしだった。優しい優しい、黄瀬の大事な恋人。

粗暴そうに見える彼の風貌とは裏腹に、彼は本当に優しい人だった。

けれど、黄瀬涼太はそれだけでは満足できない男だったのだ。

\*\*

好きな人に執着されたいって考えるようになったのは、結構前のこと。



いつも俺のことを放つたらかしにするこの人は、いつも俺を強く抱きしめて眠らない。

セックスしても、キスしても、この人は、俺のことを束縛したりなんかしない。

最初は、男同士だからそんなもんなのかなーって思っていたけれど、どうやら、俺の脳みそは、思った以上に女々しいものだったらしい。

キスした後、もう一回抱きしめられたい。

セックスした後も、もっと抱きしめられたい。

俺は、毎日そんなことばかり考えていた。

アンタの優しいセックスに飽きたわけじゃない。

俺をまるで宝物のように扱ってくれる彼に対しては、本当に愛しさしか湧かないし、粗暴に見えるくせして、俺だけには違って優しくしてくれる、なんてところは、最高にハマっている。

けれど、なんか物足りないって思っちゃうのは、やっぱり見た目に反して優しいアンタのセックスのせいなんすよね。

アンタに告白して、OK貰って、初めてセックスをしたあの夜のこと忘れちゃったんすか。

アンタ、俺のことベルトで縛り付けて、口の中にタオル突っ込んで、さらに目隠しまでして、半ば無理やりのセックスしたじゃないっすか。

泣きながら、やめてって願う俺を無視して、性器を俺のナカ

に叩きつけて、白くて熱いアンタの熱を俺の腹のナカにぶちまけて、一回じゃ足りないって言って、何度も何度も俺を愛してくれた。

壊れちゃうって泣き喚く俺のことなんか、アンタは無視してたっすよね？

口に突っ込まれたタオルは、涎でドロドロになって、途中で解放されたからいいものの、途中まで本当に死にそうだったんすからね、俺。

目隠しを解放してくれたのだって、何度も中出しされて、意識が朦朧とし始めた頃だったっすよ。

抵抗をやめて、ただアンタのちんこに喘ぎまくっている時ですら、ベルトの拘束はとかれることなく続いて…、俺、本当にアンタのセックスなしで生きられなくなるんじゃないかなあって、本気で思っちゃったくらいだったんすからね。

まあ、最高に興奮して最高に気持ちのいいセックスだったんすけど、アンタにとっては実はそうではなかったみたいで、翌日のアンタは実に情けないものだった。

記憶を失うまで中に出され続けた俺は、いつの間にか意識を飛ばして気絶をしていて、ベルトなどの拘束は解いてくれたものの、中に大量に出された彼の熱はそのまま放置されていた。当然のことながら、俺は腹を下し、真っ青の顔をしながら、トイレとベッドの往復を無駄に繰り返していた。

アンタは、ただ黙って、俺の食事を用意してくれたり、水を持ってきてくれたり、信じられないくらい優しくしてくれたよね。

……アンタはさ、きつと、引け目に感じて優しくしてくれていたんすよね。

分かってるっすよ。

アンタは、本当に優しい人だから。

あの無理やりのセックスだって、どうせ、シヨーゴ君のヤローにでも馬鹿にされたり挑発されたりしたんでしょ？

シヨーゴ君って、俺のケツすげえ狙ってたみたいだし、青峰っちと付き合ってるから、アンタとはヤンないんっすよ、とか、俺がヤローに言っちゃった翌日の出来事だもん。

そういえば、なんか灰崎がどうのこうのって、青峰っちも言っていたから間違いないだろうし。

それで、焦ってセックスしちゃったのかな？

それとも、シヨーゴ君に、あることないこと吹き込まれたりしちゃったのかな？

まあ、確かに、激しいセックスは俺の身体の負担も酷いものだったし、最悪だ、なんて最初は思ったけれど、朝目覚めた時の気分は、体調は悪くても最高なものだった。

アンタに縛られて、あんな風に激しく求められて、息も出来ないくらいの熱いセックスに、俺はメロメロだったんすよ。

アンタの強い腕も、乱暴な腰の振り方も、泣いている俺にかまうことなくセックスし続ける姿勢も。

俺の超好み。

あれ以来、俺はアンタに縛られたくて仕方ないの。アンタにめちゃくちやにされたい願望っていうのを抱いてしまっているわけっすよ。

でも、そんなお願いも出来なくて、毎晩、ベルトで身体を締め付けながらの自慰ばっかしてるってわけ。

もちろん、縛ってしまえば手が使えないから、頼るものは全部、アダルトグッズになる。入手方法は、通販とかは正直怖かったから、カッラかぶったりグラサンつけたりして、変装しまくってアダルトグッズの店に直接買いに行った。一見、リスクの高そうな行動に見えるかもしれないけれど、これが一番いい方法なのだ。まさか、あの黄瀬涼太が、変装までしてアダルトグッズを買いに来ているなんて考えないだろう。きつと、精々通販を利用していろいろ、程度に決まっている。そんな俺は、何度も足を運ばなくていいように、事前に通販サイトなどでモノを調べて、大量に玩具を買い込んできたわけである。

ちなみに、ローターから始まったこの可愛らしいお遊戯は、今となつては、前に電動オナホ、後ろには極太の強力なパイプを突っ込んでベルトで両足をベッドに固定して、毎晩イきまくっている。電動オナホなんて、未知の世界とも言えるほどの気



持ちよさだ。正直言つて、女のモノなんて必要ないくらい、最高に気持ちいいアイテム。後ろに突っ込んでいるバイブも、最初はアナル用の細いタイプを使っていたのだが、慣れればすぐに物足りなくなつて、青峰つちと同じ背サイズぐらゐの極太タイプを使っている。本当は、手を拘束してガンガン責められたところなんすけど、手を縛るとソロプレイのセックスには少々面倒なこともあるからできないのが残念。

だって、バイブは挿しただけじゃ満足なんて出来ないっすもん。

むちゃくちゃに動かして、いっぱい刺激されたいんすから。

「あつ、あん…ッ、あお、みねつち…ッ、やつ、あ…ッ、また、イク…ッ、イク…ッ」

俺は、青峰つちとセックスした夜は、毎回のように激しい自慰行為を行つてしまう。

今日も極太のバイブをアナルに捻じ込んで、自分のイイトコロをどんどん刺激していくのだ。

バイブのレベル調整なんてあまりしたことはない。

俺は、突っ込んだら、即レベルマックスに設定してしまう。

それがどんなに中で暴れ狂っていたとしても、悲鳴を上げてしまふほどの快楽が押し寄せてきても、俺はバイブの固定具を装

着して、ただされるがまま喘ぎまくる。

もちろん、足はベッドにベルトで固定して。

「あつ、あああああつ、すご、い…ッ、あん…ッ、もっと、もっとして、あおみねつち…ッ、あつ、ああああつ」

足を閉じたくても閉じることが出来ない。身体の一部の自由が奪われた性行為はどうしようもないくらい興奮する。

自慰行為はいつだって、頭の中で青峰つちに激しく犯されているのを想像してしまう。

青峰つちにひどい事言われてみたい。

(淫乱つて、言われたいな)

別に誰でもいいわけじゃないんすけど、青峰つちに犯されて善がり狂う俺を見て、鼻で笑つていじめてほしい。

もっともつと、俺を束縛して、俺をもつと青峰つちにはめて欲しい。

「あ、ん…ッ、は、あ…ッ」

ヴィイイインツというバイブ音と自分の喘ぎ声と、性において支配されたこの部屋はひどく興奮する。

けれど、無機質な機械に責められるくらいでは、正直言つて物足りない。まあ、他にやりようがないんだから、仕方ないんすけどね。

「は、あ…つ、きもち、よか、った…」

何度目かになる熱を吐き出す頃には、足も腰もガクガクして

しまう。電動オナホと極太バイブを引っこ抜くと、ドロドロになっっているオナホの中から、タラリ、と白い液体が零れ落ちてくる。性のおいに高揚した身体は、思わずそれに舌を這わせてしまう。青臭い匂いと味が口内を支配して、ちよつと不快だけれど、これを青峰つちに強いられたら、と思うとまた興奮してしまった。

「ん…、まず…」

でも、これがきつと青峰つちのだったら甘いんだろうな、っ  
て思っちゃう俺は、どうしようもないほどの変態なのかもしれない。

「青峰つち…、俺をめちゃくちゃにして欲しいっス…」

独り言のように呟いた言葉の返事は、何所からもくるはずがない。

こんな醜い願望を抱いていると知ったら、青峰つちは俺のことを嫌いになっちゃうのかな、なんて、割とよく考えてしまっている。

だから、この願望を青峰つちに言ったことはない。

でも、でもね。

出来ることなら言いたいし、伝えてみたい、だなんて考えている日だってあるんスよ。

でも、やっぱり本人を前にするとなかなか言えなくなっちゃうものなんスよ。

けれど、俺は諦めてないっスから。

いつかタイミングを計って必ずアンタに、また、初めてのあのときのように抱かれてみたいんス。

そして、もつともつと束縛だつてされたい。

俺が壊れちゃうくらい、抱きしめて欲しいんス。

アンタが思っている以上に、俺はいやらしくて、DMで、束縛願望があるんスよ

ねえ、知ってた？

青峰つち



「おつかれっスー！」

「おう、気をつけて帰れよ。黄瀬——！」

「もう、子ども扱いしないで欲しいっスー！」

俺の日常は、至って単純で平凡なものだ。

毎日、学校に行つて、部活に行つてバスケットして帰宅。それが大体のお決まりコース。

もちろん、モデルの仕事のある日もあるけれど、それだって、毎日ではない。毎日、定番となっているのは、部活であるバスケットの練習くらいなもので、それが終われば、真っ直ぐ家に帰つてシャワーを浴びて、ご飯食べて、おやすみなさい、つてそれだけのこと。

青峰つちと付き合うようになったのだから、ウィンターカップからで、お互いはバスケットに一生懸命だから、平日は部活で忙しい。

あの青峰つちも、黒子つちのところを負けてしまつて以来、毎日部活に行つていらしいのだから、平日に誘うなんて馬鹿な真似は、俺だつてしない。きつと、誘つたら来てしまうであろう、俺にはとつても甘いあの人のことだ。青峰つちの幼馴染である桃つちは、きつと俺には何も言わないにしても、青峰つ

ちに對して、物凄く激怒するに違いない。

そして怒るのは桃つちだけではなく、黒子つちも怒るに決まつている。

だから、そんな部活に一生懸命な俺たちが会つてセックスできるのは、日曜日くらいなものだ。土曜日だって休日だと言つても、大体、部活が半日以上あるのだから。

「あーあ、何しようかなあ。真っ直ぐ帰るのもなんだかアレだし、買い物とかすつかな……。バツシユも見たいし……つて、今日は財布に金はいつてないっスわ……」

そんなことを呟きながら、商店街に入つている馴染みのあるスポーツショップの看板を眺めながら黄瀬は大きなため息をついた。

今日は、土曜日。土曜日の部活は、午後過ぎくらいに終わつたから、まだ時間はたつぷりある。

携帯を取り出して、青峰にでもメールをしてみようか、と考へたその時だった。

「ねえ、オニーサン！すっげー綺麗な顔してんね」

「あー、そりやどうも？」

黄瀬に突然話しかけてきたのは、自分よりもいくつか年上っぽい若い男性だった。時折、こうやって話しかけられることはある。

モデルの勧誘か何かかなつて、それ程度に考えていると、男

は黄瀬の耳元に口を寄せて、耳打ちをした。その言葉に、黄瀬は大きな胎色の瞳を見開く。

「え……？」

一瞬、それが夢か現実なのか理解できなくて、思わず聞き返す。黄瀬の反応に、男は心底楽しそうな顔を見ると、黄瀬の手を掴んで、もっと愉快そうな笑みを浮かべた。

おい、アンタ、今なんて言った？

思わず、頬に冷や汗が伝ってしまふ。

「なあ、遊ぼうぜ？」

その言葉に、ゾクリ、と身体に悪寒のようなものが走った。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。

警戒音が脳の中に響き渡っていることが分かる。

こいつの言葉を全部否定して鼻で笑ってやらなければいけない。

いけない、というのに、俺の心臓はバクバクと大きな音を鳴らし続けて熱くなっていた。

（お、れ……、まさか……）

怖い、とか、やばい、だけじゃない。

黄瀬の脳内を支配しているのは。

確かに大きな警報は鳴り響いているけれど、俺はそこから逃

げようともできなかった。

（逃げたくない）

期待したのだ、紛れも無く。

ゴクリ、と息を吞んで、頬を赤く染めて、鼻息を荒くして俺は喜んだのだ。

『アンタってゲイだろ？俺、緊縛師なんだけど、縛らせてくんね？』

男の、その非常識な誘い言葉に……

\*\*\*

「汚いところだけど、とりあえず座ってくんね？」

「あ、はい……」

さすが緊縛師、といったところだろうか。今まで、縛ったことのある人間の写真があちこちに飾ってあるし、綺麗な縄や革ベルトが綺麗に壁にかけられていた。

しかも、そのどれを見ても芸術的だ。



ひどく艶かしく美しい緊縛。

それを見ているだけで、ゾクゾクしてしまう。無意識に熱くなる自分の中心に、なんだか恥を覚えて、俺はその場に座り込んだ。

俺は、綺麗に縛られて美しい写真にうつる女性たちに自分を重ねて興奮してしまっていたのだ。これから、自分も、あんな風に縛って貰える、そう思えば思うほど、中心には痛いくらいの熱が溜まってしまふ。

でも、そんなこと、目の前の男になんて知られたくない。

俺が「モデルの黄瀬涼太」って気づいているかどうか分からないけれど、こんな特殊な性癖を、他人に知られたいなんて思わない。

まあ、あんな誘われ方したにも関わらず、のこのことついてきたのだからバレバレなのかもしれないけれど、俺は出来るだけ平静を装っていた。

「へ、へえ、なんかすごい本格的っスね」

「まあ、一応、緊縛で賞とかも貰ってるしな」

「え、賞なんてあるんスか？」

ほら、その雑誌見ろよ、と指を指された先を見れば、SMの雑誌とは別に、芸術の雑誌に写真つきで男は紹介されていた。

そして、次のページには、彼が賞をとったであろう、美しく艶かしく緊縛された、一人の小柄な女性の写真が掲載されていた。

た。

「わ……」

「まあ、別に大したことじゃねえんだけどさ。その女、すごい大人しそうな顔して、縛られた途端、アンコをビショビショにして、縛られただけでイキまくってたなあ。街角で捕まえた女の子だったんだけどさ。……なあ、アンタも、緊縛願望あるだろ」

「え……ッ!？」

なんで、分かんのか?!なんて、きつと俺の顔に書いてあったのだろう。そんな俺の顔を見て、男は、我慢することなく、噴出して笑った。

「俺、そういうの分かるんだよね。アンタは今、男と付き合ってる、ケツ掘られてる側の人間でM体質で、とか。そういうのも」

「え……ッ」

「あ、安心して。俺、他言とかそういうのしねえからさ。そういうの、あんまり興味ねえんだよ。ただ、アンタ、すごい綺麗で可愛かったからさ、縛ってもっと綺麗にしてやりたいって思っただけ」

アンタを縛って犯したら、めちゃくちゃ可愛いと思うんだけど?」

男の掠れた声が耳元を犯していく。服から見える、逞しい男

の腕に、思わず舌なめずりをしたくなってしまう。今まで、青峰以外と関係を持ったことはないし、持つことは一生ないだろう、とは思っていた。

けれど、この男にだったら、一度くらい抱かれてみたい。自分でも怖いくらい中心が痛いほど熱くなっている。今すぐここでこの男に惨めに罵られながら、性器を擦り上げてしまいたい。普段、自慰の時によく弄くっている乳首だって、上を向いて主張していることだろう。爪で引っかいて、甘い声を漏らして、男に桃色の乳首だって舐められたい。

(ああ、ひどい願望っスね…)

冷や汗が頬を伝って垂れている。

目の前にいる男は、楽しそうに目を細めると、俺の身体をゆつくりと押し倒した。

「服を着たまま縛られるのと、裸で縛られるのと、いったいどっちがいい？」

男は、俺の頬に、赤くてしなやかな縄を垂らして、俺のネックタイを片手で解き、そして、制服のボタンを器用に外していく。このまま答えなければ、あつという間に裸にされてしまうのでは、と言わんばかりだ。

抵抗しようにも抵抗なんて出来ない。

身体が痺れて、脳から命令したって声を出すことすらもできない。

「早く答えて？」

「あ、ん…」

ああ、興奮している。

息を荒くし、俺は今、興奮している。

この男の手に、今まさに暴かれそうになっている様に。

発言も出来ず、服をすべて脱がされて、縛られそうになっている。

自由を奪われそうになっている。

(ああ、こういうのっス)

こういうの、味わいたかった。

俺は今からあの雑誌の少女みたいに縛られて、その少女みたいに、縛られただけでイってしまおうのだろう。

そして、イってしまおうたびに、目の前の男に笑われて、また、もつと興奮してイってしまうのだろう。

これが青峰っちだったら最高だったのに、なんて考えていたら、視界を布で塞がれる。

「え…ッ、あ、あの…」

「お前、誰か想像したい奴がいるならそいつでもいいぜ？縛られた姿は、あとで写真現像してやっからよ」

「あ、ん…ッ」

ベルトを外す音が聞こえたと思うと、下穿きがすべてズリ下ろされてしまった様だ。



きつと、今の自分はもう何も身につけていない。剥き出しになつていよう性器が、外気に触れてひんやりとしている。そして、待ち望んでいた縄の感触が訪れる。

「あ…、あ…ッ」

「男縛るの初めてだけど、本当に綺麗な身体してんな…。白くて、滑らか…。今まで縛ったどんな女よりも綺麗だ…」

「あん…ッ」

縄が乳首をかすめた感触に、思わず高い声が上がってしまう。興奮が抑えきれないのだ。

ミシミシという音に似た、縄と縄が引つ張られ軋む音が耳に届いた。縄の感触、音、そして匂いだけで涎が垂れてしまいそうなほど興奮している。

淫らで、はしたなくて恥ずかしいはずなのに、俺はたまらなくて仕方ない。

丁寧に縛られていく優しい感触に、より青峰つちを想像してしまう。

「…あッ」

「こっちも縛ってやるよ」

「あ、いや、そこ、いやっす…ッ、こ、こわい…ッ」

縄が性器を一周し、縛り上げられる。その苦しさ拒絶の声を上げてみたものの、その声自体は非常に甘いものだった。

本気で、拒絶なんてしてないことくらい、相手の男にだって

丸分かりだっただろう。

「大丈夫だつて。すげえ、綺麗だから…」

「あ、ん…ッ」

耳元で男に囁かれて、たまらずに腰を揺らす。

ああ、おかしくなつてしまふそうだと、思った。

こんな、見も知らずの男にいいようにされて、こんなにも興奮してしまっているなんて。

これを知ったら青峰つちはどう思うのだろうか。

軽蔑されてしまふだろうか、それとも、いつものように優しく抱きしめてくれるだろうか。

「あ、やつ、なに…？」

突然、お尻の方に違和感を覚え、声を上げる。

背中で両手を縛られているせいでうまく動くことができないのいいことに、男は自らの指を黄瀬の秘孔に侵入させていたのだ。

「ああ、ごめんごめん。君のココがあまりにもヒクつかせて俺のこと誘っていたから、つい、入れちゃったよ。写真とりたいたから、一先ず指抜くね」

「え、あ、う、うん…、…ッ、あん…ッ」

指を引き抜かれて暫くすると、シャッターを切る音が聞こえ始める。

どんな風に縛られているのかは、目隠しをされているせいで

分からない。けれど、自分の真つ白の肌を縛っている紐が真つ赤であることは知っている。

さっきの雑誌の少女を縛っていた縄も赤だった。

それは、非常に淫猥に映っていた。

頭の中で、赤い縄で縛られている自分を想像すれば、一瞬、頭が真つ白になるくらいの快楽が押し寄せてくる。

「ッ、アッ…」

どんな風にいやらしく縛られているんだろう。

少し抵抗した風に身体を動かせば、縄はミシミシと軋んで、身体に食い込んでくる。その感触がたまらなくて、何度も身体を動かせば、性器を縛っている縄が食い込んできて、さらなる快楽を生んでくれる。

「あ、あん…ッ、は…ッ」

シャッターの音は先ほどから鳴り止まない。

それどころか、息の荒い男の声までしてくる。

自分を見て興奮しているのだろうか。

この撮った写真を見たら、青峰つちも興奮して俺のこと縛ってくれるのかな。

ああ、考えただけでおかしくなっちゃいそう。

青峰つちに縛られたい。

青峰つちに犯されたい。

「んっ…、な、に…?」

「目隠ししてない写真も撮らせてくんね? マジ、興奮すんだけど、アンタの身体…」

「あ、ん…」

身体を起こされて、壁にもたれさせられた状態で、大きく足を開かされる。自分の性器どころか、秘孔まで丸見えの恥ずかしい格好だ。

でも、俺はたいした抵抗もせず、されるがまま、撮らせ続けた。シャッターが切られる度に、いきそうなほどの快楽が押し寄せてくる。

完全に勃起している性器を見下ろせば、それは真つ赤になって先端からは先走りの汁があふれ出している。

パクパクといやらしく開いた口元から毀れる透明な涎が、たまらなく淫猥に映った。

「は、あ…、いや…」

「嫌じゃねえだろ…。縛られただけだつのに、感じすぎ…。つか、こんなにいやらしいやつ初めて見たわ…」

「あ、なに…?」

黄瀬を縛り上げた男は、黄瀬の身体を起こすと、全身がうつる大きな鏡の前で黄瀬を立たせた。

鏡に映る自分の姿に思わず目が見開く。

「あ…」

「見るよ、すっげえいやらしい…」



「ん…、ん…ッ」

それは、ひどく淫猥な姿。

白い肌に真っ赤な縄で縛られている様は、まるで芸術だ。

縛られた性器だけじゃない。胸を強調するように縛られた部分など、黄瀬の桃色の乳首がより一層いやらしく映る。

そして、なによりも黄瀬の顔だ。

女性なんて非じゃないほどの美しさ、そして、いやらしさ。

きつと、黄瀬のこの姿を見て欲情しない男なんてこの世にはいないだろう。

「綺麗だろ…？ お前の身体」

「は、ん…」

こくこくと、男の言葉に頷きながら、黄瀬は瞳から快樂のあまり涙を零した。

まさか、自分の姿を見ているだけでイってしまいそうなほどまで自分の頭がイカれていたなんて考えてもみなかった。

けれど、黄瀬は自分が縛られている姿に、異常なほど興奮を覚え、見ず知らずの男に支配されている感覚に、立ってられないほどの強烈な快樂を感じていた。

「さ、わって…」

「ああ…、まずはどこを触って欲しい？」

男に強請ったその声は、自分のものではないほど甘ったるい声だった。

青峰に対してだって、こんな風に声をかけたことがないというのに、今は、名前も知らない男にセックスを強請っている。

(ああ、お仕置きされたい)

黄瀬は、舌で唇をなぞり、男に気づかれないように笑みを浮かべた。

「まずは、乳首…。アンタの指や舌で苛めて…？」

「あ、ああ…ッ」

音を立ててむしゃぶりつく男に、黄瀬はわざとらしい嬌声を上げて身体をくねらせた。

(きもちいい、きもちいい)

縄に締め付けられて、身体がいじめられてるんだ、と思うだけでイってしまいそう。

縛り上げられて真っ赤になっている性器が気持ちよくてたまらない。

ほんのりと鼻に届く縄特有の香りも、快樂を刺激する材料でしかない。

(淫乱って、言ってる？ 青峰っち…)

想像するだけで、頭がおかしくなってしまうそう。

こんな姿を青峰っちに見せたら、きつと青峰っちは逆上してくれるだろう。

そして、きつと俺に乱暴なことしてくれる。

(ショーゴ君のとき以上っスよね、きつと)

黄瀬は、自分のあさましくていやらしい身体を眺めながらニヤリと笑った。

「ねえ、感じてる、顔…、も、写真、撮ってくれないんすか？ 淫らでいやらしい俺、もっと、撮ってほしい…、俺、きつと、それだけでイっちゃうっす…」

甘えるように強請れば、男は頬を赤く染めた。

男のそんな顔見たって、何も楽しくなんか無いっすよ、と言いたいところだが、俺にとってはそれも興奮材料の一つになっていた。

男が自分を見て勃起している、その事実、笑いが止まらないくらい気持ちいい。

「あ、ああ…ッ、撮ろうか…ッ」

男は、先ほどのデジカメで何度も黄瀬を撮影した。

縄に擦れて赤くなってしまった性器ごと写真に収められて、言葉で攻め立てられる。

気が狂ってしまいそうなほど、黄瀬は快楽の海に溺れていった。

「ふふ、…ね、アンタの好きなように苛めていいんすよ…？」

「え…？」

黄瀬は、男の顎をペロリと舐めて、妖艶な笑みを浮かべて、上目遣いで甘えた声を発した。

「ねえ…シテ？」

黄瀬の言葉に、ゴクリ、と、男の喉が鳴る。

「ああ、俺、どうなっちゃうんだろう。知らない男に縛られて、今から犯される」

男が、返事も無く自分の身体にがつつく様に、黄瀬は思わず歓喜した。男が興奮のあまり何も気づいていない様子にも、黄瀬は思わず、声を上げて笑ってしまいそうだった。

「ああ…ッ、楽しい、きもちいい…ッ！汚して、俺をもっとよごして…ッ、そして、青峰つちがもつともつと俺に夢中になつてくれればいいのに…ッ」

縛られたまま犯されるのは少しだけ体が痛い。

けれど、それすらも快楽に変わる。

「ふ、あ…ッ、あん…ッ、あ…ッ」

「はっ、はあ…ッ、まじ、かわいい…ッ、ハマっちゃいそう…ッ」

「んっ、んううう…ッ」

男の声は耳障りだけれど、自分のナカに侵入している熱量に、自然と声が漏れてしまう。

「ああ、でも、青峰つちより小さいかな、コレ」

少しだけ物足りないような気がする、なんて、そんな失礼なことを考えながら、腰を男に合わせて振っては気持ちのいいところに誘導していく。



きつと、この男は、同性相手にセックスをするのは初めてだろう。

先ほどから、随分と的外れなところばかり攻め立ててくるのだから。

やっぱり、セックスは青峰っちが最高っスね。

「あ…ッ、あ…ッ」

「くっ、う…ッ」

じわり、と温かいものが身体の中に解放された感覚に、思わず目を見開いて、小さく舌打ちをした。

(最悪…ッ)

やらせてやるのはいいけど、ナカ出ししていいなんて、俺は一言も言っていないというのに、身体のナカに出された。

気持ち悪さに、身体の熱が冷めていく。

まあ、そんなことを態度に出さなければいいけど。

「あ…ッ、すご、く、よかつたっス…」

「ああ、俺も…」

甘ったるい雰囲気だと思っっているのは、目の前にいる男だけだろう。黄瀬の中では、不快感がぐるぐると回っている。

今すぐ、この目の前にいる男を殴ってしまいたい。

早くシャワールームでナカのをかきだして、綺麗に洗ってしまいたい。

「あ、ん…ッ」

ズルリ、と男の性器が引き抜かれると、ゆっくりと丁寧に赤い縄が解かれていく。

その合間に、ドロリ、と、男が自分の中に吐き出した汚い精液が毀れ出るのを感じた。

(ああ、キモチワルイ)

黄瀬が、そう思っただけでも、悪態を一切つかないのには、実は理由があったのだ。

それは、先ほどから男に撮影された写真。

自分はモデルをしている以上、写真とデータは回収しなければいけない。事務所との契約違反にだってなりかねないし、流出してしまったその日には、黄瀬のモデルとしての人生は終わってしまう。

つまり、何一つ、この部屋に痕跡を残してはいけないのだ。

まあ、無理やりされた、と言えば、なんだって通ってしまうような気もするけれど、できれば、この写真を見るのは、この世で青峰っち一人だけであって欲しい。

嫉妬して欲しい。

執着されたい。

そして、独り占めされたい。

あの人に、ただ、あの人だけに…

「写真のデータいる？」

「あー、もちろんっス！ あ、でも、お願いがあるんだけど」

ど」

「ん？ なに？」

「俺のデータはここには置いていかないっすよ」

「え…」

男が、デジカメをパソコンに繋いで写真をパソコンに映し出しているのを確認すると、黄瀬は男に手刀を落として、男を気絶させた。

当たり所が相当よかったのだろう。

男はしっかりと気絶してくれているようだ。

そんな男のように、黄瀬はほっと息をついた。

「はは、まさか、こんなところで護身術が役に立つなんて、思ってもみなかったっすよ、でも」

習ってて良かったっすわ、なんて暢気な声を上げながら、データを携帯に写すと、パソコンとデジカメから、自分の写真を全て削除した。

「せっかく可愛がってくれたのにごめんね。でも、俺の身体は隅々まで全部あの人のもんすから」

黄瀬は、携帯にキスを落とすと、服を着てさっさとこの部屋を後にした。

そして、人気のない路地裏に入り込むと愛しい恋人へと電話を繋ぐ。

あたりは真っ赤な夕日に包まれている、そんな時間になって

いた。

『あー、もしもし？ なんだよ』

愛しい男の声に、黄瀬は歓喜していた。

今から自分の言うことを聞いて、彼はいったいどんな反応を示すのだろう、と。

考えれば考えるほど、身体が熱くなっていく。

「あ、お…、みねっち…」

声が震えているのは、恐怖のせいなんかじゃない。

鼻息が少し荒いのは、興奮しているせいだ。

けれど、きつと、青峰っちは気がつかない。

だって、今から俺の言うことによつて、パニックになるはずだから。

『黄瀬…？』

ああ、楽しみ、楽しみっす。

青峰っち、どんな反応すんのかな。

「あおみねっち、ご、ごめんなさい…ッ、お、おれ、いやつて言ったのに…、いった、のに…ッ」

『お、おい、どうしたんだ…ッ、落ち着けて』

「ごめん、ごめんなさい…ッ」

『黄瀬？ 謝っていたってわかねえって、お前今どこにんだよ、そこにいくから…』

「ううん、おれ…、もうアンタに会う資格ないっす…ッ」



『は…?』

優しいアンタが俺を見捨てるはずない。

見ず知らずの男に、いきなり薬品を嗅がされて気絶。

気づいた頃には、全裸に剥かれて緊縛されました、そして、男にセックスを強いられ、逃げることもできませんでした。

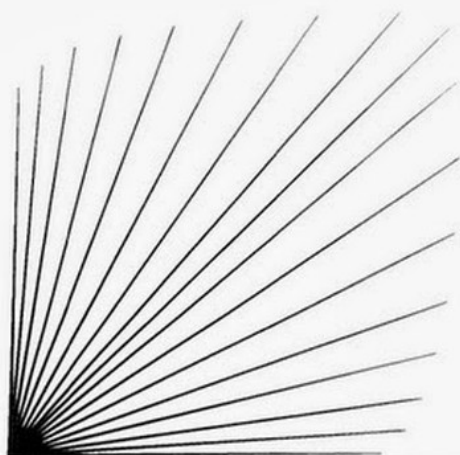
ありがちな設定だけれど、証拠写真だってあるのだから、きつと疑われることはないだろう。

完璧だ、そう考えるだけで顔がニヤけてきてしまう。

「俺、知らない男に…、むりやり、セックスされちゃった…ッ、ふ、う…ッ」

さあ、青峰っち

いますぐ俺を壊しにキテ?



俺、黄瀬涼太 26歳  
帝校商事 広報課所属

自分で言うのも何だけど  
課きっての期待のエースっす！

こっちは  
営業課の青峰大輝

青峰っち！

営業課で  
トップの成績を  
ぶっちぎっている  
すげえヤツで

&俺の彼氏様

荷みえんたよ

あんなに？

この関係は  
俺たちの秘密だ

おせーよ黄瀬ッ

おせーよ黄瀬ッ

ごめん、

そう



秘密だったんだ

だから君を愛してる

つきおかあいる



あーそーぼ



あれえ  
先輩もうこんな  
だしちやってるの？

もっとコレ  
強くして欲しいの？

あっあ…!!!

え？

んんん…

んんん!?

しょうがないなあ

ほちッ





先輩分かってますよね？  
抵抗したらどうなるのか

ちよ…

…ッ



先輩、  
エッロ…

青峰先輩とも  
こうなんですかあ？

もう俺、限界…

いっ  
るっ

はっ  
はっ

おるっ



アンタの大好きな  
青峰先輩、可哀想だねえ

ズ  
ッ

ズ  
ッ  
ッ  
ッ

ハ  
ッ  
ッ



青峰っち…

ああッ

社内でバレたら  
俺だけならまだしも  
青峰っちに迷惑がかかる…

先輩、俺のも  
舐めて下さいよお

ッはあ…

先輩の中、  
すげえ気持ちいい…

かほ

かほ

ズッ  
ズッ  
ズッ

…青峰っち、…助け…て…





…ッ  
相変わらず  
よく締まるねえ

俺らがお前の事を  
きちんと教育して  
やらねえとな…

なあ？  
黄瀬先輩？

アツアツ…

これは  
俺だけの秘密

…瀧っ

おい！

黄瀬ッ！



腹減った  
早くメシ行くぞ！

君の為の秘密だから

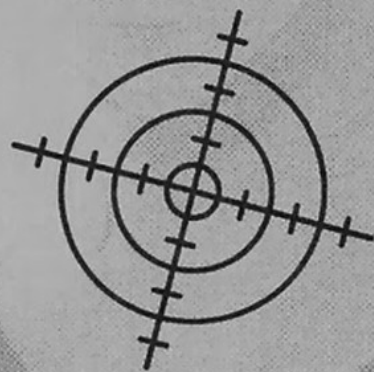
あっ！

ちよっと  
待つつすよ




**LOCK\*ON**






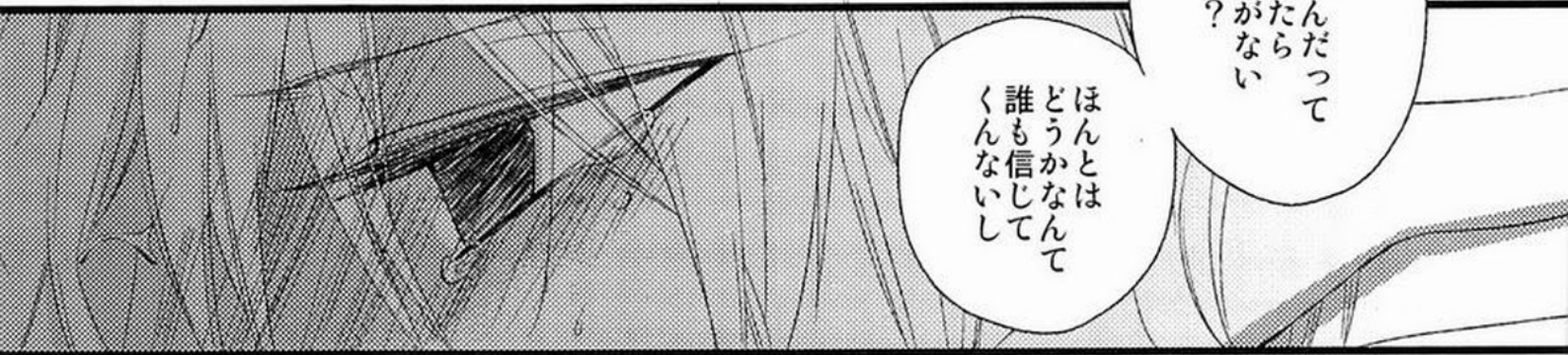
**LOCKON**




可哀想だなんて  
思っつて貰っちゃ  
困るんスよ



お前が  
誘ったんだって  
言われたら  
しょうがない  
じゃん？



ほんとは  
どうかなんて  
誰も信じて  
くれないし



悪いのは俺、  
みんなせーんぶ  
自分のせい、  
そうでしょ？

なんで、だよ

だってさあ  
そう言われて  
きたんだもん



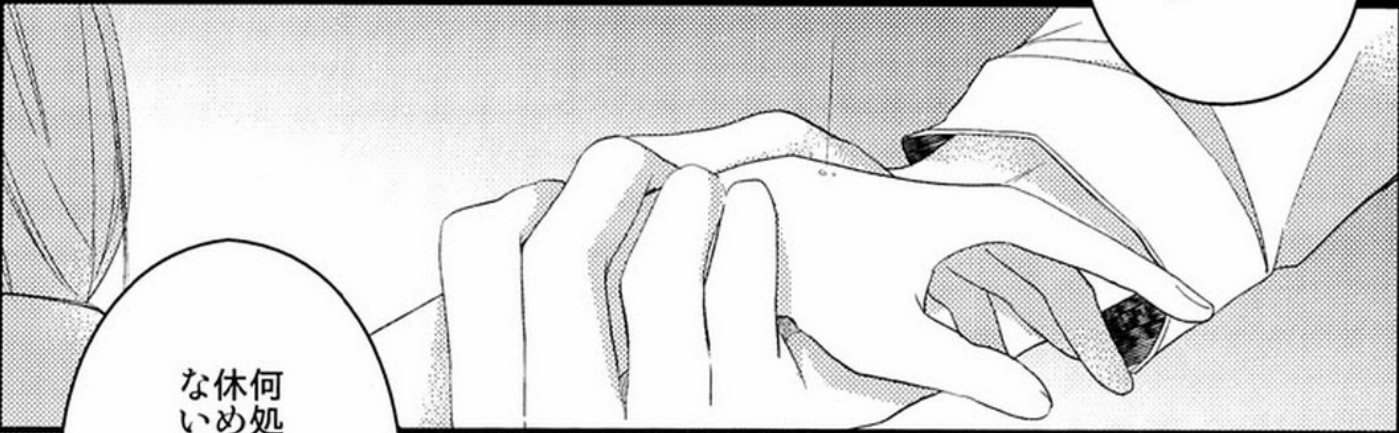


ねえ、

笑えるくらい  
よくある話  
なんすけどね



おじさんね  
ちよつと  
気分が悪く  
なっちゃって



何処か隠れて  
休めかな？

はあッ

ああ  
助かったよ  
本当  
に  
苦  
しく  
て



でも良かった  
雨が止む頃には  
元通りだ

少し  
お手伝いして  
くれるかい

大丈夫だよ  
怖くないから





ね、これ  
触れて  
握られて

や…

できな…

大丈夫



上手だね

うう…  
あつ



やだ  
いやだ

やだやだやだ  
なんで、なこれ  
びくびくして…



そう、  
そうだよ



嫌なの？  
仕方ないね

じゃあ  
お口にしようか



やああ！  
はなしてう



あつ  
ぬるぬる  
やだ、や…

ほら、  
開けて

咽喉の開き方  
分かんないかな？  
奥あたっちゃって  
苦しいね？

でも  
キュウキュウ  
締まってすごく  
気持ち良いよ

あーいい  
出すよ！

んうッ

ぬ

ふー…





吐いちゃったね

はま、

お洋服汚れるから脱ごうから

ん？

なんだ

あー君男の子だったの

後ろ姿じゃ分からなかったなあ

はる

まあ  
そんなに  
変わらないか

うえっ...えっ...  
いや...だあ...

せ

かく

ん！

思ったより  
簡単に  
入っちゃった

やあ...

お尻の穴も  
女の子みたいだね  
使えちゃうんだね  
すごいなあ

ん！  
ん！

誰かに弄って  
貰ってるの？

しらない  
しらない

やだ  
こわい  
ゆびやだ

ゆびやだあ！

嫌？  
もしかして  
おちんちんが  
いいのかな？

ん！  
ん！

ん！



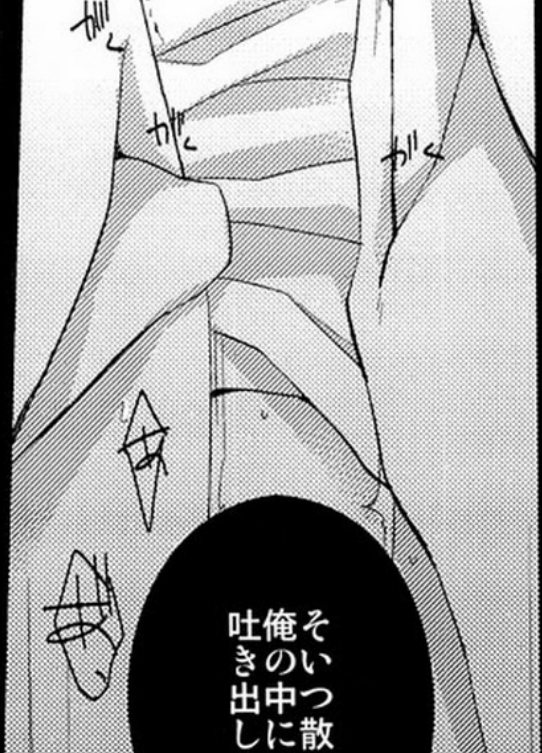




俺はまだ精液  
出なかったから  
射精しないまま  
めちやめちやに  
イカされまくったの



もーワケ  
分かんないくらい  
ぐちゃぐちゃの  
ドロドロにされて



そいつ散々  
俺の中に  
吐き出して



すっげー  
キモチよかった  
ってさあ

…覚えちゃった







それが最初



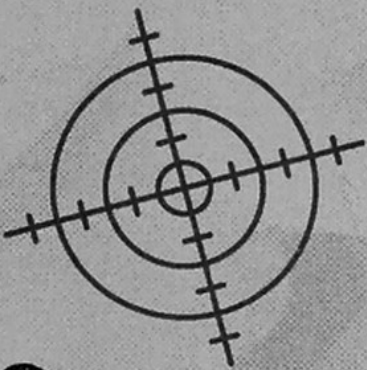
雨降って  
きたって  
ねえ

つづき  
あるけど  
聞く？



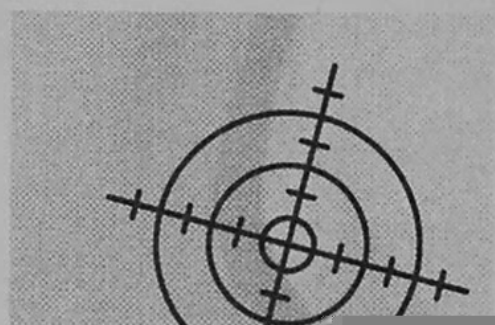
…それとも

試してみろ



**LOCK\*ON**





「おはようございます」

最初は、朝の  
挨拶を返して  
くれたことだった

その次は、放課後  
下駄箱で  
「さようなら」

その次は、仕事で  
遅れて登校してきた  
3限後の中休み  
「お疲れ様です」

その次は、偶然  
擦れ違った渡り廊下  
「先輩、誕生日  
おめでとーございます」

その次は、  
職員室前で  
「黄瀬先輩  
これからお



バレたら大変なことになるんだから

も...いやだっ

ぬけ

抜けよ...っ!

ウグウグ

男は、

性器以外にも  
前立腺という  
部分が弱いらしい

...そろそろ指で  
弄っても平気かな

ウグウグ

ウグウグ

ウグウグ

ッ!







あ、あ……

先輩、

一緒に弄られるの  
好きなのかな

射精  
止まんないし……

あ……あ

あ

あ

……可愛い

先輩、可愛い



びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ





何も、

オレ、が

言わねえんだよっ

アンタ、

だれ…っ

アンタに

何、したんだよっ

違っ



先輩は何もしてない

僕がた

先輩に触れたくて

アナタに気持ち良くなって  
もらいたいだけなんだ

だから、

先輩は何も考えなくていいんですよ

は

あああああああア……う





きつと

今回だけ

これが終わったら、  
暫くは先輩の前に  
姿を見せない

先輩のいい顔も  
悪い顔も  
知ってるのは  
この僕だけだ

時間が経ったら  
また少しずつ

それで

挨拶から  
はじめよう

大丈夫

きつとバレない

だって僕は、

ただのモブだから

やさしいヒミツ

あまなつ

「あ……あれは……」

「なんだよ、黄瀬。急に止まんよ」

「あ、青峰っち。ごめん」

「どうしたんだよ」

「……なんでもない。知り合いかなって思ったけど違うっすよ」

——いや、あれは絶対に先生だ。俺、今ちゃんと幸せっすよ。

「おまえら静かにしろ。今日から副担任としてお世話になる教育実習の先生だ。年が近いからって馴れ馴れしくするんじゃないぞ」

「はい」

そう言って紹介された先生は、すらりと長身で整った顔。一見するとクールに見える容姿に、目尻が下がったタレ目が印象を柔らかくしている。そしてツヤのある黒髪が清潔感をよりいっそう際立たせていた。

「今日から約二週間という短い期間ですが、よろしく願います」

見るからに好青年というのが第一印象だった。教育実習が赴任することはそれほど驚くことでもない。少なくともこの時、黄瀬涼太は、特に関心を持たない大勢のうちのひとりだった。

「あれ？先生なんでここにいるんすか？」

「お、黄瀬涼太か。俺はこのバスケット部だったんだよ。って、おまえさっきの話聞いてなかったな」

そう言えばそんなことを言っていたような気もするが、興味がなかったのか全く頭に入っていなかった。悪気はなかったの、すみません。と笑って謝れば、仕方ないかと返される。悪い人間ではないというのは、少し話ただけで分かる。

モデルをしていると色々な種類の人間に出会う。むき出しの敵意も、羨望の眼差しも、値踏みするような視線も、慣れてしまったわけではないが、普通の高校生よりも大勢の人の目に晒されてきたので、相手に自分がどう映っているのかということとは、なんとなく分かっってしまう。

「先生モテるでしょ」

「おまえなあ。嫌味にしか聞こえないからやめろ」

「えー、そんなことないのになあ」

軽口を交わし、練習を始めると先生もゲームに加わった。大学でもバスケットを続けているだけあって、身のこなしは軽やかだ。シュートフォームが無駄がなく綺麗な放物線を描いてゴールへ吸い込まれ



ていく。派手さはないものの、見ている人を魅了し一緒に戦う仲間  
に安心感を与える。敵にはしたくないタイプの人間だ。

今のチームにも不満はないし、当面の目標だつてある。なにより  
黄瀬は、日に日にバスケットが好きになっていくことを自覚している。  
そして、思いつきバスケットに夢中になっている時だけは何もかもを  
忘れられる気がしていた。

「今日はこのくらいにしておこうか」

「えー、なんか勝ち逃げされたみたいなんすけど」

「勝ち負けとかじゃないだろ」

騒がしかった体育館も、気づけばふたりだけになっていた。人が  
いなくなるとコートが広くなったような気がする。先生とのバスケ  
は時間を忘れるくらい楽しかった。試合以外でこんな風を感じるの  
は久しぶりだ。

それから、部活の後も残つてふたりでバスケットをするのが日課にな  
りつつあった。

「えー、なんか面倒なの押しつけられちゃった気がするんすけど」

「おまえ、部活とかであんまり準備手伝えないんだから、それくら  
いは貢献してもバチ当たらないだろ」

「確かに。それもそうっすね」

文化祭の準備で、クラスメイト達は連日遅くまで残っている。黄  
瀬は部活がない時も、モデルの仕事があるので、ほとんど手伝うこ  
とができない。雑務だろうとなんだろうと、クラスの一人として声  
をかけてもらえるのは嬉しかった。

「失礼しまーす」

生徒会室とプレートが掲げられた扉をノックする。普段は全く縁  
もゆかりもない場所なので少しばかり緊張する。中からどうぞとい  
う返事が聞こえてきたので、綺麗に磨かれたドアノブをゆっくりと  
回す。

「あ、先輩。お久しぶりっす」

「ん？黄瀬か。おまえがこんな場所に何の用だ」

「先輩で……つてか、会長つて呼んだ方がいいっすか？」

「どっちでもいい」

本当にどっちでもいいのだろう。教室の奥から気だるい返事が返  
ってくる。

「へへっ、じゃあ会長。これ提出しに来たんすよ」

「ああ、文化祭のか。そこに置いておけばいいから。どうせ押しつ  
けられたんだろ、ご苦労さま」

「バレちゃったっすか」

「おまえ部活までまだ時間あるんだろ？ちよっとおつかい」

そう言つて小銭を手渡され、自販機まで歩き出す。黄瀬と生徒会  
長というと、何の接点もなさそうなのに、ふたりが親密に話すのに

は理由があつた。

会長は、半年ほど前までバスケット部に在籍していた。肘の故障が原因で部活を辞めてしまった後も、何かと黄瀬を気にかけていた。

「はい、すっかりパシられてきたっすよ」

「人聞きの悪いことを言うなよ。おまえの分も買って来たんだろ」

「そこはしつかりと」

「あ、そういやこの前バッテリー笠松さんに会つたぞ。また顔出すつてさ」

「わー、またしごかれるっすね」

生意気だった自分を可愛がつてくれた先輩たちには、本当に感謝している。黄瀬にも後輩ができて、改めてそんなことを感じていた。

「あれ……ない。ごめん、ちよつと忘れ物。先帰つてて」

バクバクとうるさい心臓を落ちつけようとすればするほど、その鼓動は速くなる。拳をぎゅつと握りながら来た道を引き返す。

職員室には誰の姿もなく、用務員室で事情を説明し部室と体育館の鍵を借りる。明かりの消えた体育館はどこか不気味な雰囲気だったが、そんなことに構ってられない。

「先に部室。ロッカーには……ない。落ち着け、落ち着け」

部室にはどうやらないようだ。焦る気持ちを抑えられず、体育館へと駆け出す。コートを隅々まで探し用具倉庫も調べたがお目当て

のものは見つけれなかった。

「くそつ。一体どこに……あ、そう言えば」

最後の望みを託して、目的の場所を見上げるとまだ明かりがついている。

「よかった、まだ会長いるんすね。部活始まる前に寄つた場所だから、きつとあそこにあるはず」

冷静になつて思い返せば、部活を始める時には、もう既になつたような気がしてきた。とすれば、最後に立ち寄つた場所で落とした可能性が高い。

「あれ、さつきまで電気ついてたのに。入れ違いになつちやつたんすかね」

そう思いながらドアノブに手をかけると、するりと抵抗なく扉が開く。不思議に思いながらそつと隙間から目を凝らすと、ふたつの影が動いた気がした。いや、実際に動いている。

黄瀬の足がびたりと止まる。動かないのではなく動けなかった。

「ちよ……やめつ……こんなところで」

「いまさらやめらんないでしょ、ほら」

「あつ……ん、あ、あつ……バカや……ろ」

全く予想していなかった甘い声が、黄瀬をその場に凍りつかせる。暗闇に目が慣れてきた頃、見てはいけないという危険信号が頭の中で鳴っているのは分かっていたが、確かめたいという黄瀬の好奇心の方が勝つた。



「な、なんで？先生と……会長。」

「ふうっ……ん、あっ……も」

「ここ好きだもんな。いつもより感じてる？」

「ぼっ……ほんと、いい、加減に……しろっ」

はつきり表情が見えるわけではないが、漏れてくる声が目の前で繰り広げられている光景を物語っている。早くここから離れなくてはと思うのに体が動かない。

——あつ。

暗闇で会長と目が合った気がした。その瞬間、金縛りが解けたように全身が自由になる。とにかく遠くへ。大切なものを探しにきたことも忘れて、ただ夢中で走った。どうやって家までたどり着いたのか全く覚えていない。それだけ衝撃的だった。

「あんな会長の声聞いちゃって、俺……まともに顔見れないっすよ」  
ふたりに気づかれてしまっただろうか。目が合った気がする。いや、あの暗闇では気づかれていないはず。そんなことをぐるぐる考えている間に、ゆっくりと眠りに落ちていった。

「……せつ、黄瀬。おい、黄瀬」

「え、あ、なんスか」

「おまえ、今日一日ボーっとしすぎたろ」

「そ、そんなことないっすよ」

会長には、生徒会室にでも行かない限り顔を合わせずに済む。で

も、先生のことをすっかり忘れていた。忘れようとすればするほど昨日の光景が浮かんでくる。

——夢とかじゃないっす……よね。

「黄瀬くん、これよろしく。会長のところに提出しといてね」

「えっ、それ今日じゃないとダメっすか？」

「うん、締め切りが今日なの。とういわけで、お願いしまーす」

一日中、挙動不審だったせいで、きつと先生にも怪しまれたに違いない。そのうえ、会長にまで会いに行かなければいけないなんて。

堂々としていれればいいと思うものの、なかなか踏ん切りがつかない。生徒会室の扉を開けることもできず、近くをウロウロしていると、廊下の端に今一番会いたくない姿を見つけてしまった。咄嗟に体を翻し逃げだしてしまう。どうせ今日中には行かなくてはいけなのだが、マズイと思った時には既に走り出していた。

「ちよっ、おい」

「ごめんなさい、ごめんなさいっす」

「おまつ、待て」

夢中で走り、階段の死角になっている場所で盛大なため息をついて、しゃがみこむ。しかし、すぐに見つかってしまった。

「おい、黄瀬。俺から逃げ出すなんていい度胸してんな」

「わっ、会長。あー、えっと逃げたとかじゃないんすよ」

「いいからちよつと来い」

そう言い終わる前に、ずるずると引つ張られて歩き出した。生徒会室に着くと、そこに座れと言われるままに腰を落とす。

「会長。あの……俺、誰にも言いませんから」

「やっぱり、昨日の知られてたんだな」

「絶対に言いませんから」

深いため息をつきながら、会長の顔がどんどん近付いてくる。咄嗟に目を瞑ると、額にぴしつという衝撃が走る。

「いたつ、痛いっスよ」

「ばーか。おまえがそんなこと言いふらすなんて思ってたねーよ。というか、あれは俺たちが悪い。嫌な気持ちにさせたな。悪かった」

昨日は、驚きと衝撃と妙な興奮と、色々な気持ちが混じっていた。

それでも、ごちゃ混ぜの気持ちの中に嫌悪感はなかった。

「あいつも教育実習の身なのに、ほんと軽率だった。すまん」

「いえ、なんというかびっくりしたんすけど、でも嫌とかそういうんじゃないっス」

「気持ち悪くないのか？」

「えっ、あー。そんなこと考えもしませんでした」

抵抗を感じるどころか、想い合っていないければあんなに切なくて甘い声は出ないだろうと思うと、羨ましいような気さえした。

「黄瀬？」

「あ、ほんとに大丈夫っスから。逃げたりして、すみませんでした」  
「いや、こつちこそ悪い。そうだ、これ。もしかしておまえのか？」

そう言って会長の手には、きらりと光るピアスがあった。黄瀬が必死で探していたものだ。

「あ、よかったっス。これを探しに来たんすよ」

「大切なものなんだな。大事にしろよ」

詮索しないでいてくれることがありがたい。それは、小さな青い宝石が装飾されたシルバーのピアスだった。

——いつもピアスつけてるからさ。これ、やる。なんかきれいだろ。

贈った本人はきつと深く考えていないのだろうが、黄瀬にはまぎれもなく宝物だった。

「それじゃ、俺は部活行きますね」

「ああ、がんばれよ」

全く予想していなかったハプニングではあったが、不快感や嫌悪感はなく、むしろ会長の意外な一面を知り、今まで以上に身近な存在に感じた。

「お疲れでしたー」

「おう、お疲れ。あ、黄瀬。ちよつと」

部活も終わり、体育館を後にしようとする先生に呼び止められる。なんのことも察しがついたので、他の部員には、すぐに追いか



けるから先に帰っていて欲しいと告げる。

「すまん。本当にすまん」

「はははっ、ちよっと頭あげてくださいよ。俺に謝ることじゃないっすよ」

「あいつにも、ものすごく怒られた。ほんとに悪かったな」

「いや、大丈夫っすよ。会長にも同じこと言われたし」

会長に本気で怒られている先生があまりにも簡単に想像できてしまったので、つい笑ってしまう。

「それより、なんかラブラブみたいでうらやましいっすよ」

「おまえだったら、女の子よりどりみどりだろ」

「先生、オヤジくさいっすよ」

確かに女の子にはモテると思う。一生懸命、気持ちを伝えてくれるのも嬉しい。

「先生よりはモテるかもねー。でも、自分が好きになった人に好きになつてもらえないなら……意味ないっすよ」

「……黄瀬？」

「はい、俺の話はここまで。あんまりハメ外しすぎるとまた会長に怒られるっすよー。ほどほどにね、先生」

それから不思議なことに会長と先生とも仲良くなり、部活終わりに一緒にご飯を食べる日も増えていた。他愛もない話をたくさんして、ふたりが恋人になるまでの話もこっそり先生から教えてもらっ

た。会長に聞くと恥ずかしがって教えてくれないのだ。

年上の知り合いがいらないわけではないが、仕事で出会う人たちとは、必要以上に仲良くなることは少ない。ふたりと仲良くなり、兄ができたような気分だった。

「俺、まだ仕事残ってるから、あいつと先帰ってて。鍵渡しであるから」

「了解っす。じゃあ、会長と先に行ってますね」

次の日の部活が夕方からの軽いメニューだとわかり、先生の家で夕飯を食べることになった。生徒会室へ会長を迎えに行き、そのまま買い物も済ませて先生の自宅へと向かう。

本来ならば、教育実習中に特定の生徒とこんな風に親密になるのは歓迎されることではない。それは黄瀬も分かっている。学校では三人が一緒にいることはほとんどなかった。

「カレーっすよね。俺も何か手伝いますよ」

「って言っても、切って煮込むだけだから大丈夫。適当に座ってる」

「なんか、新婚さんのお家にお邪魔したみたいなんすけど」

「パーカ」

ぐるりと部屋を見渡すと、やはりバスケの雑誌やDVDがたくさん並んでいる。それをパラパラとめくっていると、玄関から先生の声が聞こえてきた。

思ったより早かったな。と言いながら、鞆を持ち、スーツの上着

を預かる会長の姿を見て、本当に奥さんみたいだ。と心の中で呟く。

バスケット部の中では、会長とは仲がいいほうだと思っていたが、ここ数日で初めて知る顔に驚く。学校での顔が嘘というわけではないのだろうが、きつと先生の前でいる時が一番安心して素に近い状態なのだろう。

「あー、満腹。美味しかったっす。会長、ほんとにいい奥さん」

「そうなんだよー。黄瀬はよく分かっている。料理上手で床上手！」

「おまえら、ほんとにいい加減にしろよ」

せめて片づけは手伝うと言った黄瀬だったが、台所に立つふたりを見ると無理に入っていくのも悪い気がした。ゆっくりしている、という言葉に甘えることにした。

——いいなあ。あんな風に好きな人と一緒にいられたら、どんなに幸せっすかね。

言い合いをしながらも楽しそうなふたりを見て、自然と目元が綻ぶ。満腹感と部活の疲れが押し寄せ、知らず知らずのうちにソファに凭れかかり、意識を手放していた。

——ああ、みねっち……青峰っち……。

自分の顔が濡れている。それが何だろうかと考える前に、温かい感触が降ってくる。何が起こったのか分からない黄瀬は、それでも

まだ完全に頭を覚醒できないでいた。そうこうしている間にも、顔中に優しいキスが降ってくる。そうだ、キスだ。気づいた瞬間に一気に目が覚める。

「え、なんで？会長……なにしてるんすか」

「おまえ、自分じゃ気づいてないだろ。泣いてたんだよ」

そう言うのと、ペロツと涙を拭われる。濡れているのは自分の涙だったと気づき、同時にガバツと顔をあげる。

「え、でもなんで？え……」

「こいつはね、黄瀬が泣きながらうなされてるのを見て、どうしても放っておけなくなっただって」

「あ、えーっと。なんか、すんませんっす」

憧れて追いかけて、一度は遠く離れて、それでもまた追いかけて。やっとまたあの頃のように正面からぶつかることができると思っていたけれど、彼を振り向かせたのは自分ではない。

戻ってきてくれてよかった。バスケットを誰よりも好きだった彼が戻ってきてくれて本当良かったと思う反面、この気持ちはずっと押し殺すことになるという現実には、時々押しつぶされそうになる。普段は意識していないつもりだったが、会長と先生の仲良さげな様子を見て、自分でも気づかないうちにダメージを受けていたらしい。

「謝ることじゃねーよ」

「ありがとうっす。あー、なんかほんとふたりが羨ましいっすよ」  
目元を拭いながら、痛々しい笑顔をふたりに向ける。



「俺も誰かい人見つけないとなー。でも、面倒なのは当分ごめんだから、体だけの割りきった関係とかのほうがいいっすね」

「黄瀬……」

「あ……、冗談っすよ。さてと、ふたりの邪魔しちや悪いから、俺はそろそろ帰るっすね」

そう言うって立ち上がろうとすると、会長に無言で手首を掴まれる。

「俺たちはね、黄瀬のことがかわいいんだよ。なんか弟みたいなき感じ。だから、こいつも色々心配なのよ」

「先生……それは嬉しいっす。俺も兄貴がふたりもできたみたいで。でも、ほんとに大丈夫っすから」

突然の告白でなんだか照れくさいが、嬉しい。学校内で、しかも先輩と先生とこんなにも親密になれるとは思ってもみなかった。

そんな黄瀬を見つめ、会長と先生が視線を絡ませて何かを確かめるように笑う。

ゆつくりと会長の体が黄瀬に覆い被さった。優しく緩やかな動きながらも、確実に黄瀬が動けない体勢で体重をかけられる。あまりにも一瞬のことで、何が起こったのか分からない。

「黄瀬、何も考えなくていいから。とにかく俺たちに任せてればいいから」

「えっ、え……なに？えっ」

自分の置かれた状況を必死に理解しようとするも、思考が追いつかない。

「ん……っ、ふあ……や」

「黄瀬、口あけて」

会長とキスをしている。先生のいる前で。こんなことやめなくてはどう思うのに頭の芯が痺れて力が入らない。啄むように舌を噛み、角度を変えて幾度もキスが繰り返される。耳に息を吹き込まれ背筋にびりつと電流が走る。

「耳弱いんだ」

「ちがつ……ス。あつ……」

意識が朦朧としてくる。これは夢かもしれない。いや、きっとそうだ。そう心の中で繰り返ししているのに、これは甘い現実だと告げるように、口づけとは別の熱が下に集まってくる。

「なにっ、や……あ……んっ。そんなとこ」

目眩がしそうなほど熱い。間近にあった先生の顔がいつの間にか下へと移動している。するりと下着の上から優しく撫でられたかと思うと、そのまま下着ごと啞えられる。焦る気持ちとは裏腹に徐々に黄瀬のモノは熱を帯び、先端から先走りが零れている。

暴れようにも、上半身は会長に、下半身を先生にがちりとホルドされて身動きがとれない。

「や……、せんせ。そこ……や」

「おまえね……そんな顔で、そんな声で言われても逆効果だろうが」  
やわやわとズボンの上から触れられると、我慢できずに声が漏れる。明確な意志を持って黄瀬の上を動き回る手にどんどん体は熱く

なる。先生に触れられた場所がいやらしい熱を帯びてくる。黄瀬の中心は欲望の形に張りつめ、追い立てるように次々と刺激されると、どうしようもなく身悶えるしかなかった。

「あ……は……」

「うん、素直に感じてればいいんだよ」

「こつちもな」

下半身の熱に集中していた黄瀬の意識が再び唇へと向くように、乱暴に貪られ、きつく吸われる。黄瀬の意識が快感に引きずられていく。

「ん……んう……つ、あ……かい……ちよ」

吐息と唾液の混じる温度に恍惚となり、かすめとられた舌が愛撫の波に翻弄される。動きを封じられ、繰り返される口づけをただ受け入れるしかなかった。燃えるように熱い唇が触れるたび、全身が甘く痺れる。ようやく唇が解放されたと思うと、耳に低く掠れた声を流し込まれ、その感触にぶるりと震える。

「まだまだこれからだよ」

「……つ」

そう言うと、黄瀬の背後に回り込み上半身を抱き起こす。下半身は相変わらず先生の手が自由に動き回り、黄瀬の先端からは蜜が溢れていた。下着を剥がされ顔を埋められる。咄嗟に足を閉じようとするが、会長が背後から抱き締めて大きく膝を開かせる。先端を舐めては唇を窄めて吸われる。

「ああ……つ、そこ……ん。いや……つ、いやだ」

「嫌じゃなく、イイだろ。言ってみ？」

「や……ん、はっ……ああ……ん」

「じゃあ、こつちも触ったらどうかな」

黄瀬の乳首を指の腹で押しつぶすようにして確認し爪を立てる。黄瀬自身ですら意識したことのない場所を刺激され、熱がじわじわと肌に染みる。

「あ、なに……や……んう」

尖り始めた乳首を会長に摘まれ、親指と人差し指の間でこりこりと揉まれると、今までに経験のない感覚が生じ思わず身を振る。その動きが、結果的に股間を先生へと押し当てることになってしまう。

「そろそろ、こつちもいいかな」

「ん……あ……せんせ」  
尻を掴み、じわじわと揉んでいた先生の両手が、双丘の狭間を辿って後孔を探り当てる。固く閉ざされたそこを優しく撫でられる。

「え……つめつ……たいっす」

先生がきつく閉まった襞を撫で、ゆっくりと押し開く。指が入っ

てくる異物感にぎゅつと目を瞑る。いつの間にか目の前に会長の顔があり、再び熱い唇で貪られる。

「きーせ、こわくないから」

「はふっ……あっん……ん」

口づけに夢中になっていると、黄瀬の中に入る指が一本、二本と



増やされる。最初は冷たかったジェルもいつの間にか熱くなり、ずちゆりという淫靡な音が響く。

「はっ、ああん……んっ」

ひとときわ高い声が漏れ、体が跳ねる。

「ん？ここ……？」

「あ、ダメ……っス。せん、せ、ああっ……」

その一点を押されるとたまらない熱が押し寄せる。体のあちこちからもたらされる感覚は、快感を強くするものでしかない。

集中的に責められ、先生の指を締め付け、最後の理性も手放してしまった。全身をびくんびくんと痙攣させながら射精すると、悲しいのとは違う涙が滲む。

「ふっ、あ……はあ」

全身を倦怠感が襲い、掻き回された指が離れていく。違和感しかなかったはずなのに、ぼっかり空いた場所が寂しいとでもいうように、ひくひくとする。そこへ、ずるりと熱いものが押しあてられ、ぐいっとなんて入ってきた。

「あ、んんっ……」

無意識にぎゅっと締めてしまい、先生の声が漏れる。

「黄瀬……、ちよつと緩めて。力抜いて……」

「そんな、無理っ……ス」

会長の口づけが深くなり、同時に前を握られると意識がそちらに移る。黄瀬の緊張が解けるまで先生は動かさずにじっと待っていた。

「ゆっくり息して」

「ふう……かいちよ、かい……ちよ」

ゆっくりと呼吸を促すようにし、会長は再び黄瀬の乳首を弄る。舌先で転がされ、少しずつ黄瀬の力が抜けてくる。感覚だけが鋭くなってくると、入口に当てられた熱がもどかしい。

そのことに気づいた先生がゆっくりと侵入してきた。あちこちに快感の熱が散らばっているせいか、誘われるように中にめり込んでくる。

「ん……んっ、あ、はいって……」

「黄瀬の中、あつついわ」

「っあ……ッふ」

「ごめ……、ちよつと我慢して」

そう言うと先生は抜き差しを激しくする。小刻みに揺れていたのが、大きなストロークになり段々と激しく貫かれる。

「や、あ、あ……んんっ……あ」

黄瀬の声が甘さを帯びたものに変わる。胸の粒は会長に弄られ、後ろを先生に激しく貫かれている。前も後ろも激しく擦られて、けなしの理性も飛ばすしかなかった。

「今は全部忘れて、気持ちいいことだけ感じてればいいから」

「あ、あ、あ……も、もうイクっ……あ、もう」

真上から杭を打たれるような角度で貫かれ、黄瀬は声もなく体が痙攣させる。下腹部へ温かな飛沫がぼたぼたと散り、黄瀬は自身が

達したことを知る。直後、先生も熱い奔流を放った。

どこにも力が入らなくなり、黄瀬は意識を完全に手放していた。

「おやすみ」

「いい夢見てるといいな」

翌日、降り注ぐ陽射しが眩しくて目が覚めると、体中のあちこちに違和感はあるものの、名残は全て綺麗になっていた。

「おはよう……っス」

どんな顔してふたりに会えばいいのかわからないと思ったが、ふたりの態度はいつも通り変わらなかった。

「おはよ」

「あの……昨日は……」

ふたりの間に流れる空気は気まずいものではなく、むしろ似合わないくらい爽やかなものだった。

「びっくりした……よな？」

「そりや、まあ」

「なーんか、おまえがツラそうな顔してんなーとは思ってたけど、投げやりなこと言うからさ」

「あれは……、言葉のあやっスよ」

体だけの関係を考えてこともあった。でも実際に何かをする勇氣はなく、自分とは無縁のものだと思っていた。それが昨晩は、何がキッカケだったのか分からないが、境界線を踏み越えてしまった。

「どうしても寂しくなったら変なこと考えずに俺たちを呼べばいい」  
「え……っ」

「いつでも優しく可愛がってやるさ」

どこまでが冗談なのか本気なのか分からずに、返す言葉を見つけれないでいると、先生に優しく頭を撫でられる。

とんでもないことをしてしまったという実感はあるが、ふたりが大切に想ってくれているというのが伝わってくる。それは、ふたりの間に流れるような好きの気持ちとは違うけれど、それでも今の黄瀬にはどうしようもなく温かかった。

「おまえはちゃんと幸せになれるよ。だから間違っても卑屈になつて、後悔するようなことするなよ」

黄瀬の秘めた恋心の話はしていないが、きっとふたりには分かっていたのだろう。それを追求もせず、論すこともせず、そのままでもいいと言ってもらえることが嬉しい。

それから、この関係はどうなるのだろうかと心配もしたが、驚くほど何事もなかったかのように平穏な日々が流れた。秘密の夜は、後にも先にも、あの日一夜だけだった。

今すぐにこの恋心をどうすることもできなくても、目の前の辛さに流されて後悔するようなことだけはしないとふたりに誓った。

あつという間に先生の教育実習の期間も終わり、すぐ後を追うよ



うに会長も卒業してしまった。

高校生活ではバスケや仕事、色々な思い出の中でも、あの日のことは、甘い秘密の記憶として深く封印してある。

——もしかして、あの時ふたりに出会わなかったら、ヤケになって今頃青峰っちの隣にることなんてできなかつたかも。

ふと、そんなことが脳裏をよぎり、懐かしい気持ちになる。

「おい、黄瀬。やっぱり、おまえなんか変だぞ」

「変じゃないっすよー。青峰っちも知らない俺の甘い青春の一ページを思い出してたんすよ」

「なんだそれ。てめっ、浮気は絶対許さねーぞ」

「はいはい。ちゃんとかまえとくんすね」

いつかこうしてバツタリ会う日が来るかもしれないと思っていた。その時、あの可愛い後輩が笑顔でいてくれたらいいと、何度もふたりに話していた。

「あいつ、幸せそうだったな」

「だな。あの日のことは俺たちだけの秘密だ」

用具室

わりい  
遅れた

オイ  
早く入れよ

誰にも  
見られなかった  
だろうな

だーいじょうぶ  
だって

それより  
もう  
始まってんな

すっげ  
イイ

な・ん・で

噂の  
イケメンモデル  
黄瀬涼太クンの  
セックスショー♡

もっつ  
出る……っ  
くっ!

あー  
いいわ

こんな  
ことに……





はい  
黄瀬くん  
こっち向いて

……っ

110  
ヤツ

嫌な予感  
はしてた

ふっ

3111

き、黄瀬くん  
この間の  
雑誌見たよ



先輩なのに  
やけに下手で  
おどおどしてて

無視もできず  
軽く  
あしらってた

人に  
見られるのは  
慣れてたけど



いつも  
見られてる  
気がして

青峰  
関係が  
つない  
よ







きーせーくん♡

ちよつと  
いいかな〜？



大人しく  
しろって

…っ

生意気  
なんだよね〜

あんま  
調子のつてると  
痛い目見るよ？

モデルだか  
何だか  
知らないけど





…良かった

バ  
し  
て  
な  
い

…こんな  
ことして  
どうする  
気っスか

殴って  
気がすむ？

は  
い

違  
ー  
よ

そんなこと  
したって  
つまんねーじゃん

!?

オレら優しーから  
こいつの  
願いを叶えて  
やろーと  
思っつてな♪

NSN…

まさか  
行動にうつす  
なんて

黄瀬…

お、オレ…  
オレさ…

…なっ

カ  
キ  
カ  
キ





やっ  
やめ...っ!

やめろよ!

はなせよ  
くそっ

イヤだ!

暴れんなって

オイ  
うるせーから  
口塞げ



ぐっ



黄瀬...

はあ  
スー  
スー

か

ん...っ

ちゅ  
ちゅ

ちゅ  
ちゅ

はあ  
ね  
え

はっ

い  
や  
だ  
こ  
ん  
な  
の  
...

んっ  
...

ふっ

ビ  
ク  
ッ





やだ!!

ふう...うっ

!!

おまえ  
いつまで  
やってんだよ

い...やだ  
はあ

大人しく  
しろって

さー  
黄瀬くん  
いい子でちゅねー

気持ち悪い...っ



へー  
かわいいじゃん  
まこちには  
用はねーけど

かあ...っ

!!

びん...  
びん...

入れちゃう  
けどねー

ちっちええ  
穴だな

これ  
入んの?

みち  
みち

びん

びん



…っ  
きつつー…っ

でもオマエ  
初めてじゃ  
ねーの？

すっげ  
気持ちいいん  
だけど

ん！

んんっ

ぐっ

マジで？ モデルって  
男とやりまくる  
仕事なんじゃね？

キィやほはっ

黄瀬くん  
気持ち良さそー

そっちも  
触ってやれよ

…なわけ  
ねー…だろ…っ

やべ  
オレもう  
イきそ…っ

んっ

ふっ

ぬほっ





!?

休むヒマ  
ないぜ〜

次  
オレな〜

びび〜  
びび〜

びび

中に...

ほっ

く...っ

ふうふうふう

ぬちゅ

早〜く

終わる〜

ふほっ

黄瀬...

黄瀬...

は





穴が  
締まった

んっ  
ぶっ

ちゅっ  
はっ

ちゅっ  
んちゅっ

んんっ



びゅっ  
ちゅっ

ちゅっ

黄瀬くん  
ストーカーの  
キスで感じ  
ちゃってんの？

お  
♡



いやだ！

あっ  
♡

はっ

おっ  
かわいー声  
出てきた  
じゃん♡

ふっ  
あっ

やだ

あんっ  
♡

ちんこも  
おっ勃ってんぜ

ぬ  
ち





ドゴツ

ほら  
黄瀬くん

こっち向らてー

かーわいー♡

カ  
ヤ  
ウ

ゴホッ

やだ...

この写メ  
がっこやマスコミに  
流したら  
どうなるかな

なっ!

やめ...ろ...

返せよ!

さー  
どうしようかな

それは  
黄瀬くんの  
心がけ次第♡





ほら  
黄瀬くん  
オレの舐めてよ

んっ  
っ

噛んだら  
しょうちしねーよ？

んっ  
っ

ほっ  
ぬっ  
っ

ぬっ  
っ

んっ  
っ

んっ  
っ

んっ

いやだっ

もっ

むっ



言ったら？  
オレら  
優しーって

ふ・あ  
なに……？

っ  
っ

黄瀬くんが  
もっと  
気持ちよく  
なっちゃう薬

んっ  
っ





な……っ

……だっ

いやだ……あ

口が  
お留守だぜ

い  
ほっ

ん  
ん

もう……

何も  
考えられない

ほら  
黄瀬く〜ん

もっと  
ケツ上げて  
腰振れよ

ん  
ん

ギョははっ  
犬  
みて〜

んっ







ト  
ト  
ト

ト  
ト  
ト

ト  
ト  
ト

ふああああーっ

あッ  
ひあっ

ト

ト

お  
お

ト  
ト  
ト

ゴ  
ゴ  
ゴ

じゃーな  
黄瀬くん♥

良かったぜ〜

ストーリーカー君に  
感謝だな

次もオレらが  
呼んだら  
すぐ来いよ

じゃないと  
動画と写メが  
どこに  
出回るか  
わからないからな

あ、  
今度は  
他のヤツらも  
呼んでやるよ

良かったね〜  
黄瀬くん

黄瀬くんと  
やりたいヤツ  
たくさんいるし

もっと  
かわいがって  
もらえるぜ

オレら  
優し〜♪

黄瀬くんは  
さあ

オレらの…







……  
そっか……

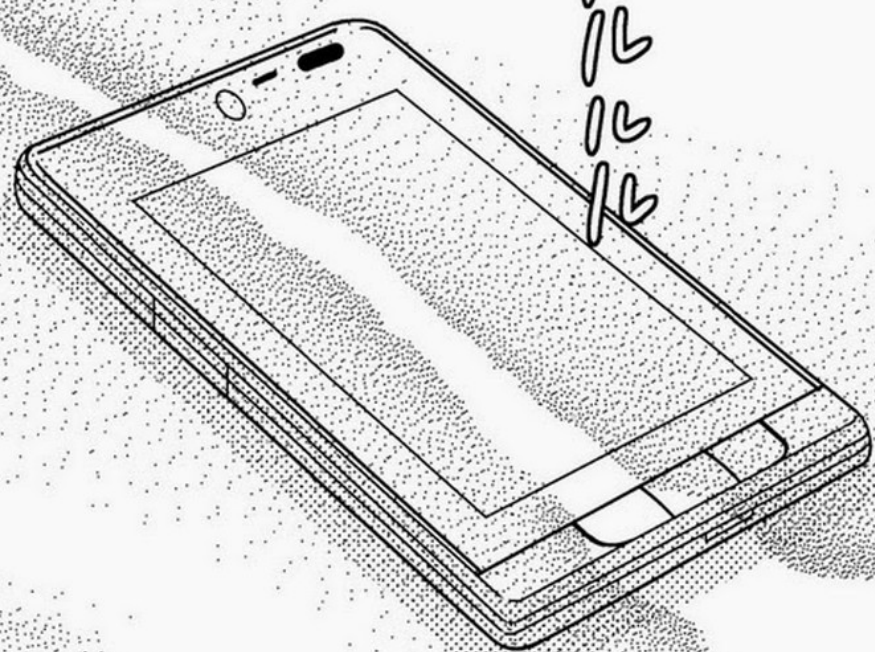
ブルブル



ブルブル

オレ  
電話しようとして  
たんだった

ね、  
青峰  
っち……



ブルブル

## COMMENT



**お誘い有難うございました！**

黄瀬君はどうしてこんなにぶち犯したくなるんでしょうねツ^▽^

架月

sigmastar/pixiv : 660535



**祝アンソロv**

黄瀬君を描く機会を  
与えてくださって  
ありがとうございました！

市花マツビ

locker80/pixiv : 1518929



# モブ黄アンソロ発行 おめでとうございます!

今回、このような素敵なアンソロにお誘いいただきまして、  
ありがとうございました!

知らないおじさんに、あるいは仕事先の人にあんなことや  
こんなことをされてしまう黄瀬君の本…////

とてもとても楽しみにしておりました!

本当に心底楽しみにしてませんでした!

ありがとうございます!!!

私は!黄瀬君の!お尻が!とっても!心配です!超がんばれ!!!



真嶋しま

ALCO / <http://alco.moo.jp/>



モブ黄アンソロ発行おめでとうございます!

お誘い頂きありがとうございました。  
黄瀬は本当に魔性で天使であざとくて可愛い  
生き物ですね!!!

idiot / 高橋あさみ

高橋あさみ

idiot / pixiv : 1588287

おさそいありがとうございました♡  
可愛い黄瀬くんが名も無きモブに



このすばらしいアンソロに参加できて嬉しかったです。  
ありがとうございました☆

かづき

混合色 / pixiv : 2508415



アンソロ発行おめでとうございます!

そしてお誘い頂きましてありがとうございました。  
伝えたいことをうまく表現出来ているかは別として  
とても楽しく描かせて頂きました~! 黄瀬くんは  
弄られて苛められて愛されてとても美味しい子ですね!  
素敵な企画に万歳三唱です♪

モウ黄瀬くんです♡

うにゃあ うさもり / <http://usamori0211.blog.fc2.com>

お招きありがとうございました!  
みなさんの愛され黄瀬くんが楽しみ☆≡

黄瀬くんって魔性って言葉が  
どうしてこうも似合うのか

ニシナ

Not Equal / pixiv : 4314200



モブ黄アンソロ発行  
おめでとうございます。

…すみません。  
このあと保険室の先生も黄瀬くん  
に落ちました。罪な男(\*'▽`\*)  
早く皆様のモブ黄を談みたいですよ



春乃ハナコ

hana\* Gallery / <http://hana321love.jp/>

アンソロ発行おめでとうございます。  
普段は清純派気取ってあんまりエロ書がないので(笑うとごです)  
非常に楽しく書かせていただきました。  
お誘いありがとうございました!

いつもは青黄メインで活動しています。

Pixiv: 2834252

Twitter: @SparkMaster\_K

SparkMaster 灯里

灯里

SparkMaster / pixiv : 2834252

はじめまして。

いつもは青黄で漫画を描いています。ウエノと申します。

モブ黄アンソロご発行おめでとうございます。  
このような素敵な企画に参加出来たことを大変嬉しく思っております。  
お声をかけて下さった主催のakoさん、本当に有難うございました。

ウエノ深



ウエノ深

ハートブレイクマン / pixiv : 3050753

モブ黄アンソロ発行おめでとうございます。  
モブ攻めなのにレイプじゃないけどいいのかな、と変な心配を  
しながらも楽しく書かせていただきました。  
お誘いいただけで本当にうれしかったです。  
ありがとうございました！

おたま

pixiv : 3336256



モブ黄アンソロ発行おめでとうございます！

素敵なアンソロにお誘いいただきありがとうございました！  
モブ攻めは好きだったんですが、描くのは本当に初めて  
でしたのでごく悩みました。  
どうしようか考えた結果、こんなお話になりました。  
黄瀬くんごめんよ…。たぶんあの後青峰くんが  
赤司くん達と一緒に逆襲してくれると思う…！

皆様のモブ黄、今からとても楽しみにしています！！  
この度は本当にありがとうございました！！！！

れな

ささはられな

07KOUBOU / <http://07koubou.com>

モブ黄アンソロ発行  
おめでとうございます！

この度はアンソロ発行おめでとうございます！こんな素敵な  
アンソロに参加できてとっても光栄です…！！モブ黄…！！

えっちい黄瀬くんがとってもかわいくて大好きなので本当に  
発行が楽しみです…！！本当に場違いなお話ですみません…

昔役はもう少し純粋な黄瀬受けを書いて活動しています…笑

アコさん本当に素敵なアンソロの企画ありがとうございました！！

モブ黄万歳！！黄瀬受け万歳！！ピッ瀬ばんざー…！！！！

昔役は黄瀬中心でバコ系の18禁小説を書いています。 ピクシブid=2351102

ココ ツイッター\*cocoapooo



AIPO  
ココ

ココ

AIPO ! / pixiv : 2351102





モブ黄アンソロご発行おめでとうございます!!  
恐れ多くも豪華なメンバーにお呼ばれ頂いて  
緊張しますが、とても嬉しく思います^^  
アコさんいつもありがとうございます。御座います。  
話したがりのビビリなので大変感謝しています。  
お誘い有難う御座いました(\*^▽^\*)

ところであのモブきつと私です笑  
ずっとやってみたかったリーマンもの描けて満足ですw

つきおかあいる うさもり / <http://usamori0211.blog.fc2.com>

おまわりさん、毎度どうも、私です。  
ありがとうございました!

Mob×KISE  
Anthology  
ThankU4allpeople

齊木マキコ ぴくりんさん / <http://angie.under.jp>



モブ黄アンソロ発行  
おめでとうございます!  
お誘いありがとうございます!  
又秋めい

又秋めい Poisoning / <http://poisoningxxx.jimdo.com/>

THANKS!

アンソロ発行おめでとうございます!素敵な企画にお誘いいただき、本当にありがとうございました。青黄前提のモブ黄を高校2年生の設定で書かせていただきました!自分のものは置いておいて、狙われている黄瀬くんをたくさん読めるのが今から楽しみです!普段はシャラっとしてるのに実は真面目でがんばり屋さんな黄瀬くんが愛しいです!!ありがとうございました!

あまなつ

mix juice / pixiv : 4717728



ako

crowmania / <http://rk-i7.sakura.ne.jp/>



この度はモブ×黄瀬アンソロジー「Loc☆on〜K常エースでイケメンモデルが狙われてます〜」をお手にとってくださり、ありがとうございました！  
いろいろな方のモブ黄が読みたい！という欲望だけで計画したこの本、執筆者様・ご協力くださった方のおかげでこんなに素敵な一冊になりました。  
編集作業がこんなに楽しかったことはないです。何度モブになりたい、その役変わって！と思ったことか。モブ達はきっと私達ですね♡  
最後になりましたが、お忙しい中執筆をお引き受け下さった皆様、告知や制作にご協力下さった皆様、印刷所様、アンソロに携わって下さった全ての皆様に心から愛と感謝をこめて。ありがとうございました！

crowmania/ako

# Lock☆on

〜K常エースでイケメンモデルが狙われてます〜

2013年8月10日発行

発行 crowmania/ako

印刷 日光企画

<http://mbks.x.fc2.com/> (期間限定)

禁止：無断転載・複写・ネットオークション

Thanks: エリ〜(ロゴ制作)

ayumu

showya matsumoto

